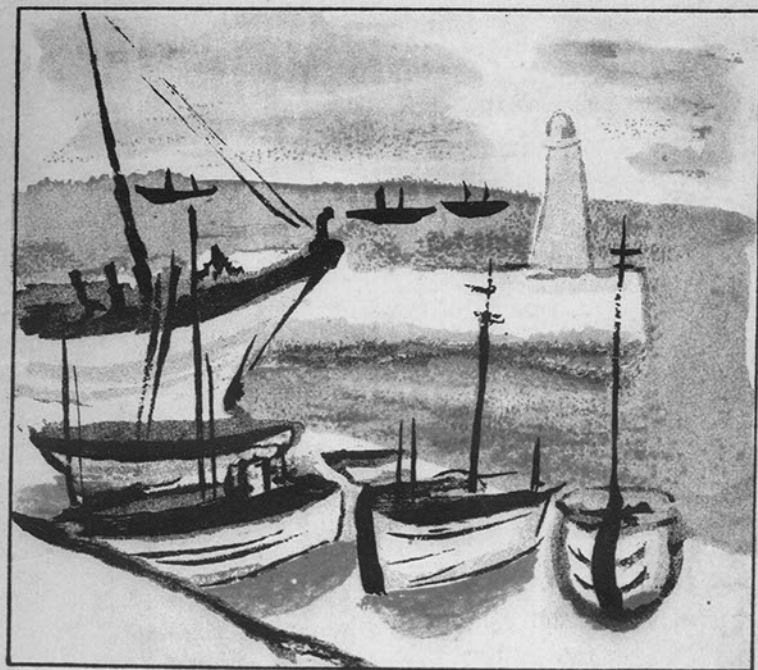


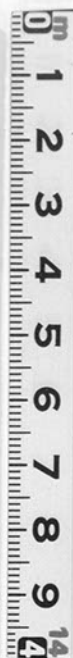
杉下光吉

海 蒼

創刊号



小名浜第一中学校生徒会



蒼海



文化の殿堂

金 美 館

TEL 670

品質本位の店

牛 豚 肉

中野商店 電298

株式 紙屋呉服店
株會

TEL 675

教育楽器 樂譜 管弦樂器

西野屋樂器店

和洋酒 味噌 醬油

星 酒 店

TEL 290

キャンデーセンター

國華堂菓子舗

本店 TEL 461

賣店 TEL 177

時計 メガネ

内山時計店

TEL 173

青果物、菓子食料品ならなんでも

松 (M) 屋

TEL 38

新鮮・美味な つけ物は

西野屋商店

TEL 529

クスリの御用命は

長生堂藥局

TEL 370

絶対強い スマートな

運 動 靴

雨靴 長靴

小島ゴム店 TEL 340

貴方の御家庭にカメラを!!
カメラマンの店

伊勢丹カメラ店

チケットを御利用下さい

TEL 404

蒼海 創刊號 目次

勉父或と新あ		春然難		——詩——		創發		卷頭言	
学				元は蒼		刊刊		創	
年れるの				だ		の		を	
と				且		ラ		祝	
るのし冬想の				か		ろ		刊	
示				試		運		の	
計いのい				作		木		海	
1				轉		び		て	
朝畫朝朝出死ツ		感題當		辭		P・T・A		校	
一ノ四				二ノ五		一ノ一		長	
二ノ六									
三ノ二									
一ノ三									
二ノ四									
三ノ一									
熊渡五堀長鈴鈴		鈴草作		稻佐緋友山鈴鈴					
十				川藤		谷村美		市嘉孝	
谷邊		木野山		敏耿枝		子郎勝雄			
嵐江		木							
川		辰敬							
光清勝									
達		靜雄一		之薰介子郎勝雄					
子美美修清也孝									
………		………		………		………		………	
10 16 15 14 13 12 11		10 9 8		6 6 5 5 4 3 1					

詩	短歌	即	職	句歌	詩海交
草夜遙野	孤夢短卒			壇壇壇	
のか	業			※一ノ一 小野ヒサ子、二ノ四 米澤恵夫子、三ノ一 草野容子、二ノ六 高橋介克、三ノ一 加藤津子	
スな	歌を			二ノ一 馬場公枝、二ノ六 北川郁子、三ノ七 高橋恵夫子、二ノ一 橋本香枝子、三ノ一 斎藤忠正	
刈	祝			一ノ五 布施恵子、二ノ一 松原敦子、一ノ二 小泉光子、三ノ一 吉田ミチ子	
ケる	五			二ノ三 平子サダ子、二ノ四 遠藤喜久、一ノ四 山本豊美、二ノ六 清野簡子、三ノ五 上野山	
ッ希	い			三ノ七 鈴木眞砂子、三ノ五 仁木万里子、二ノ四 宮本恵子、三ノ五 門馬智恵子	
りチ望茨愁想首て	興			※三ノ三 菊地裕吉、三ノ五 大瀧正榮、三ノ二 得田利子、三ノ一 海老根泰三、三ノ二 大平孝	
				※二ノ一 柴田貞夫、二ノ六 本田忠男、三ノ七 近内貴、二ノ一 馬目一行	
村柚Y草	小明小石杉無				
岡木	松沼月山下				
英・	嘉十公佐				
芳之	一寛子子子方				
夫助M苑	一寛子子子方				
82 67 67 66	66 66 66 65 65				

音籠	テソ卓排陸野	と讀を希道思先春空隨一星べ思秋
フ	上	番
ニト	部わ	生嬉山
樂球	ボ球球競球	後のいとと
ス	技報	すの
ル		生た遊
部部部部部部部		こ
れ感夜春憶出徒秋		想とてカ出ぶ
主		
將		
K遠峰岡笹石蛭鈴		
・藤松原井田		
武部美選		
T福一政砂		
生子郎弘義子一孝		
42 38 37 36 35 33 31 29		

小鶴高坂小本古佐鈴大清田高栄沼	
峯田木本	
利征智	
枝	
子子子勝子子彦子恵子子彰子子美	
28 28 27 26 25 24 24 23 22 21 20 18 17 17	

汗 顔 高 言

酒井 円應 68

創作

猫	私	明	三	島
は	る	吉	の	の
蚊	い	と	い	お
で	う	いう	う	う
あ	名	の	少	年
る	生	活	年	む
件	活	年	三	三
二ノ一	三ノ二	三ノ二	二ノ五	三ノ三
木下清作	柴田セツ子	吉田弘	川上潤太	鏑木カツ子
70	74	75	82	84

回

想

志賀昭太郎 94

子供銀行組合便り	子供信用組合便り	編集集後記	表紙	カッツ
102	103	104	105	106
稲川敏之	稲川敏之	稲川敏之	稲川敏之	稲川敏之

創刊の辭

校長 鈴木孝雄



小名浜中学校発足以来、生まれ出るべくして生まれなかつた生徒會誌が、今回文藝部の先生方の御盡力によつて発刊の運びとなつた事は、小名浜第一中学校の輝やかしい歴史を一步前進させるものとして喜びに堪えない。

当校発展と共に郷土小名浜の名にふさわしい吾等の會誌蒼海が、遂年立派に成長する事を信じて疑わないものである。

戦後道義が地に落ちたとよく言はれる、誠實と勤勉が最高の名譽ある地位を與えられるような社會が形づくられなければ、信用ある獨立國としての日本の着實な歩みではないと思う。ともすると口先の上手なもの、うまく立ちまわるもの、政治的かけひきの巧みなものが用いられ、よい地位を得られる様な社會風潮では、堅実な社會は育成されない。それには個々の日本人がしつかりした信念を持つ様にならなければならない、損をするから正道を進まないと云う巧利的な考えを棄てて、正しいと信じた事は、どんな困難があり損があつてもやり通す意志、千万人と雖も吾行かんの氣概が大切であり、その信念が必要である。

信念を持つと云う事は大切な事である。敗戦の経験のない日本人が、徹底的にうちのめされた敗戦によつて、獨立した今日未だ日本人の眞の姿を発見出来ないでいると云うのが現状ではあるまいか、人生觀も世界觀も、あらゆる日本の思想の源をなしていたと思はれた理想主義の哲学や孔孟の教えが、戰勝國アメリカの實用主義に塗り替へられて、その表面の思想や行動だけを猿真似するのに吸々として、其の日其の日の生活に追われ、金もうけに手段をえらばず、享樂

に走ると云うのが國民の風潮となつたのではあるまいか。

眞理を追求し、原理を發見し、科學の進展をはかり生活を豊かにする眞の世界、正邪を識別し、正しい倫理觀を持ち、堂々と自己の正義觀を實行する喜の世界、文學を觀賞し、音楽や美術を愛好する美の世界、神佛を信心して得る安定觀、即ち聖なる宗教の世界。この眞善美聖の西歐流の世界觀は、たゞ獨逸が日本同様敗戦の憂き目をみているとは云い、人間生活の基本的な哲理であると信じている。

米國の占領は終つた、然し日本の植民地化には相當根強いものがあつて一朝一夕では仲々ぬけきらない。社會の混亂さは字窓にある諸君の想像以上のものがある、しかもこの混亂は今後も相當長い期間つづくものと考えられる。再軍備を唱いて諸君を再び戦場に立たせようとするもの、主權を天皇を唱える復古調の人々、責任のない自由を叫んで日本の社會を破壊しようとするもの、全く吾々の祖國日本は今や冷い戦争の主戰場化しているようにさい思われるのである。

諸君は善なりと信じた事はあく迄も主張し眞理の探求に専念し、美しいものを美しいと感ずる情操の淨化につとめ、豊かな人生を送り得る人間となるよう修養につとむべきである、そして誠實と勤勉が最高の名譽ある地位を與えられるような社會の形成に協力すべきであると思う、尙新しい命題としての祖國愛即ち、およそ國家への忠誠は近代國家が國民に課した不動の鉄則であると言う事、及び之の事に對する吾々國民としてのあり方について、よく考いて確固たる信念を持つよう心がけるべきであると強く感じてゐる。

以上所感の一端をのべて創刊の辭とする。

創刊を祝して

P T A 會長 鈴木 嘉勝

うるおいのない人生程味氣なく淋しいものはないと思います。藝術を味い得ない人の姿にはゆとりも、暖かさも、うるおいも感じること出来ません。

皆さんは春の野をさまよつた事がございました。その時胡蝶の戯れる美しい花が目につく事でございました。春のぬくみとうるおいの恵みに咲いた花こそ貴方達の今の姿なのです。日頃のお勉強が役立つてこの様な立派な文藝誌蒼海を生み出した事は本当に喜ばしい事です。こうした事が力あづかつてやがては貴方達の人生にうるおいを持たれ、そして人としてのよき質を結ぶ事が出来る事と信じます。昔の眞の武士は武道ばかりをたしなんではいなかつたそうです。文武の道を兼ねそなえた武士こそまことの武士だつたと讃えられて居ります。そして平和を喜ぶ日本の國を築きあげる心の強い皆さんは、藝術を理解する事が出来、しかも科學的である人になつてほしいと思います。蒼海の誕生を機会に益々この道の勉強を積まれて、私達の學校の目あてとしてゐる情操の豊かな人になつていただきたいと思ひます。

つめたいと見える太平洋の蒼い海原には、暖い黒潮が流れて居る事をお解りでございました。

暖味のある人になつて下さい。そして蒼海の様にならう風には怒り立ち、やわらかな風に對しては静かさを持つことの出来る人になつていただきたいと思ひます。私達PTAは生徒會誌蒼海の創刊を心から喜び、こゝに代表して御祝いの言葉をのべた次第です。

發刊のよろこび

山 口 市 郎

新制中學校開校以來こゝに六ヶ年の年月を過しました。その間學級新聞とか文集の様なクラス單位の印刷物は多少にかゝわらず發刊されて居りましたが全校全体として全校の皆さんから原稿を募集して一冊にまとめたのは今回が始めてこんなよろこばしいことはありません。この「蒼海」を完成出版するまでには幾多の先生方の御骨折と地域社会の多くの人々の蔭ながらの後援によるものであります。又この誌の爲に投稿された先生方や生徒諸君の好意に對して深く感謝致しております。この様な誌を毎年刊行されることを切に――希望し蒼海の將來益々發展し全校の生徒諸君の投稿されたものを一人残らず掲載されることを重ねて希望します。

この誌は中學校生活の思出の最もよき資料と思ひ永く――保存して時折引き出して讀んで戴きたいと思ひます。

ローラー運転

一の 一 友 村 美 枝 子

學校の歸り道

黒い機関車のようなローラの

オートバイをのうな鉄のペタルを

おじさんはくつでふんだ。

ゴウゴウとおそろしい音を立て始めた。

長く上に出了た棒をグツト右に廻すと

ローラは動き出す。

ハンドルを両手で握り

右にねじれば左にいき

左にねじれば右にいき。

ローラはごうごうとなりひびいて

道路はゆらゆらゆれて地ひびきする

バリバリと石がこわれて

みじんになる。

ローラの通つたあとを見ると

石はありの行列のよう

美しく道が、ひしやけていた。

あのおじさんは、えらいものだ

つくづく思つた。

蒼 海

緋 谷 耿 介

若い。

未熟な色合の調和は

たくましい力と熱を

與えてくれる。

ときには、すさまじいなりを立て

靜まることを知らない。

しかし

なんの出来事も知らなかつた

水平線はいつも美しい。

しわがれた声がとだえ



太く強い息吹きの変錯が
満ちた溢れた時

あゝ快適な
海

一九五二、十二、二十八

はだかの木

二年五組 佐藤 薫

木々は葉をのこらず落し

寒そうに ポツリ

ポツリと立っている

あわい日の光が ふりそぐ

風は歌いながら 去つていく
まるで

枯れてしまつた様だ

だが木は生きている

俺と他人を比較すると

五尺二寸も三寸位に見える

そんなにイデけていた。

全く不景氣だつたのである。

分からない時はイバツテいた

分りかけた時からイバれない

イバれないとかイバルとかは

クダらないことではあるが

とにかくだんだん強くなることだ

俺に強くなることだ

強いということは美しい。

一寸むずかしいと思うが

俺にとつてはそうなのだ。

俺の自覚は、俺に強い

そこから出発しなければ

俺は俺がみにくいと思う。

俺は粗野だ

枝の中を

根からこすえまで

この木が

いつもたえまなくのぼつていく

はだかの木のそばに立ち

そのかすかな音をきいた



元旦 試作

稲川 敬之

太陽の如く輝け

獅子の如く咆哮せよ

希望せよ、勇ましかれ

元氣を出せ、デカクなれ

オ、我が五尺二寸の軀よ

云いたいことも云えず

人前に出るとオゾオゾし

だから俺をきらう奴もいる

しかしもつと粗野になりたい

粗野になればなる程

自然の聲がはつきりきこえる

そうゆうとき、人間の聲程

俺をげつそりさせるものはない

自然に負けるな

お前を俺の物にする

俺はお前を美しくし

そして俺はお前に育てられる。

オハヨウ 太陽

六千度のカタマリ

お前の光でカクゾ

お前に育てられた大地の上の

大きな山や、大きな川や

大きな木のカタマリを。

全く不思議なものだ

春になれば、なんでもかんでも
一ぺんに歌いだすし

秋になれば、おとろえていく
どうしていつまでも青くないのか
しかし見榮のはるやつが一番先に
くたばるのは愉快である。

アア デツカイ眞晝間

嗤うな、笑えワツハツハア

この空 この大地

中間におしこめられている

五尺二寸の俺

俺を伸ばせ、伸びるぞ

デカクなるぞ

この頃は胃の具合が
全くいいのである。



春 雷

作 山 敬 一

「先生お變りありませんか、僕も元氣です今茨城の方
で大工の仕事にはげんでおります。先生と別れて一年半
になりましたね。僕も家からはなれて、社會に出てみる
と學校時代の事が思い出されて夜も眠れない時がありま
す。旅に出てみると頼りになる人は誰もありません、そ
して學校時代の生活がつよく反省させられ不勉強に後悔
させられ無中に仕事に当ることがあります、先生の顔を
思い浮べて泣く時もあります」——後略——

昭和二十六年の三月卒業した一生徒からの手紙の一節
であるが讀みながら何か心の温まる感じを起させられ在
りし日の事が生々しく頭に浮んで來たのでした。

彼の中學校時代の生活はいわゆる問題児で注意人物の
一人であつたのでした。家庭的に恵まれない彼は時に問
題を起し再三再四悩まされた生徒で顔の赤くはれる程た
いた時があつた。それだけに印象も深く残り卒業後の

無 題

草 野 辰 雄

更生を念じていたのであつた。卒業の日に唯一言「先生
さようなら」と卒業證書をまるめて歸り去つたきり一年
半一度も顔を合した事もなかつたのであつたが同年輩の
生徒に會うとどうしているかなと考いさせられてはいた
のであつた。

若い者には若い者の情熱がどこかにその躍動をはら
んでいるものである。彼の不行儀な學校生活の中にも若
き血潮は更生の望みを捨てなかつたのである。徒らに高
校に進學し學校と云う規範の中に生活されるよりはむしろ
世なれのしない素朴さの中に苦しむのも人生の意義深
い一つの生き方ではないかと思う。

冬枯れた路傍の雜草がほこりにまみれながらも早春の
聲と共に若芽を出し飾らざる花をつける姿に溫室育ちの
草花にみられない聖に以た自然の力の偉大さを感じさせ
られるのである。意氣に感じ仕事に精出してゐる彼の將
來に幸多かれと祈るのである。



學生時代ゲーテの「ファウスト」を讀んだ、最初はそ
れ程の期待もせず、唯有名なので、本屋に有つたから買
つて來たのだが。然し、讀了後の感激は今でも新しい。
人間の内部の「神的」なものが「魔的」なものによつ
て如何に刺戟され、如何に生成し、それから如何に之を
征服し、又淨化されるか。

次々と彼の作品を讀んでいくうち私は完全に彼の虜に
なつてしまつた。其の後は彼に関する研究書、彼の作品
を夢中になつて讀み漁つた。無け無しの金を工面して苦
勞して本を買集めた事も今では楽しい思い出になつて
居る。

私は彼の偉大な「人間性」に感激した。茅野蕭々は、
著書「ゲーテ研究」の序文に於いて、彼こそは真に「人
間的な人間のなかの最も偉大な人間」である、と云つて
居る。人間ゲーテの生活に處する態度が、如何に眞摯に

雜 感

鈴 木 靜

しても、ひたむきであり、その天壽を全うするまで若木のような持たざる者を持つたものであるか。彼が最後に云つた言葉として、*「もつと光を」*は遍く人口に傳へられて居る。

彼のその「生き方」には、内外面兩生活に於て、學ぶべき多くのものが潜在して居る事を確信し、次に彼の言葉を二三載せて、簡単に紹介しておきます。

▽どんな偉い事を考へても、それは誰かが一度考えた事である。けれども問題は、自分が一度考えたとする事だ。

▽束縛されているのはまた大した奴隷ではない。束縛されていながら大した不自由も感じないのが、これが本当の奴隷である。

▽私は他人の畑を上手に歩く人よりは、獨自の路を歩んで迷い兒になる人の方が好きだ。

▽急ぐな、しかし休んではいけない。



雨のそば降る冬の宵、一人机に向つて本のページを繰つていた。ふと「あやまち」の一語に目をひかれ、その瞬間から私の心は過去の想えいと靜かに流れてゆくことを知つた。誰もあやまちを犯したいとは思わない。然し私達の進路には、許されるべき小さなあやまち、或はとりかえしのつかない重大なあやまちの數々が待ち構えている。だから行動に於いて良心的であるばかりでは足りない場合が多い。特に強調したいのは適正な判断力であると思う。複雑極まる人生の多くの場に於いて、正しい判断を下すためには、豊かな知識と体験の必要性が生れて来る。教養も大切である。思うに誠意を盡くしてもあやまち場合もおこり得るわけである。こんな時は良心に忠實でありたい。

素直に事實を認め事柄によつては深刻に後悔し、自責し、再び同じ失策を繰返さないように努力すべきでは

からうか。そこに新しい希望が生れ卑屈な心も一掃されて明るい道が開られてゆくと思う。寛大な心を持ち、あやまちなるものもあやまちと認め、苦難の人生を切り抜け自己の進歩を計つてゆきたい。犬の遠吠えに靜かな夜は更けてゆく。電燈の光が急にあかるくなつた。

今日一日の疲れをいやし明日という日を迎えよう。

勉学とスポーツ

三年一組 鈴 木 孝

僕は學生生活に於ける最大の楽しみはスポーツであると思う。

もちろん學生である以上、知識の修得に努力し、人間としての修養を積むのは当然の事である。しかし、人間という大きな立場から見れば、勉學のみで立派な圓滿な人間とは言えない。明朗な性格や、健全な思想は健全な身体から生まれるものである。この健全な身体を養うのはスポーツである。

そのあふるような元氣を二度ともどらぬ青春時代

に、スポーツを通じて奮闘し精神、肉体の發達の段階としたい。スポーツを考へる上において、最も重要なものはスポーツマンシップであり、この美德はスポーツに際して必ず十分に備えていなければならない條件である。今盛んに叫ばれているスポーツマンシップとは、正直、明朗、沈着、忍耐、勇敢、斷行等であり、これ等はスポーツによつて養われるところが多く、僕は無限の修養に努力しなければならない。病氣となつて身体をこね、勉學にたずさわる事ができず、折角修得した知識も應用出来ない人々、またこのように身体のことにかえりみずスポーツをなさざりにして勉學のみに力をつくした人達、スポーツのみに歩み、スポーツのみに力をつくした人、この人達は共に片輪の人達である。

學生生活において、勉學（教養を養う）とスポーツ（健全な身体を作る）との兩輪がマツチして初めて、將來社会に立ち活躍する文化人の土台となる事が出来ると思ふ。

犬の死

二年三組 鈴木達也



朝起きて見たら雪がちら／＼降っていた。父が「今日は寒い日だ」と元氣のいい聲で云った。今日は山へ木こりに行つた。姉とおれと兄と弟で、妹は留守、姉と兄は木を切りたおす、おれは切りたおした木をひと所に集める。父は今日も湯本へ行つてしまった。弟は杉葉拾ひをやつた。

その中に晝近くになつた。妹が息を切らしてかけて来た。姉があわて、「何んだ」と聞えた。妹はがっかりしたような顔で犬が死にそうだと云つた姉もおれも兄も弟も皆んなで家へ行つて見た。そして納屋の前で苦しうに横になつて今にも死にそうなかつこうでびく／＼つとやつていた。何にか毒なものでも食つたのだと兄が云つた。姉が苦しがつているマルをだき起して見たら横腹に大きな穴があいていた、だれを空気銃でうつたのだ

。あんなにかわいがつていた父が歸つて来たら、どんなにがっかりするだろう。

夕方早く父が歸つて来た、おばちゃんの病氣は相變らずだと云つた父は、まだマルが死んだとは知らない。いつもなら父が歸つて来るとしつぽをふり／＼とびあがるのに今は死んでいる。そう考えるとおれは悲しくなる、父が腹へつたと云つてごはんを食い始めまる、すると魚の骨がのどにひつかかつてひどいめにあつた。父が魚の骨を犬に食わせるのにマル／＼とよんだマルは出てこない父は別に氣にもせず台所に魚の骨をなげた。マルは出てこないはず、今頃冷めたくなつてカマスの中に入つて

12

いるだろう。おれは思い切つて「マル死んだ」と云つた。父はそれを聞くと「おや／＼」とがっかりした聲でいつた。今まで腹へつていた父がごはんを食いのこした。そしてマルは「どこにいた」ときかれた。納屋の中に入ると云つた。姉はふろたきをやつて出てこない。弟も兄も妹も出てこない。父に電燈を持つてやべと云われた。おれはしかたないから行つた、父はかいちゆう電燈を照らしてどこだと云つたそのカマスの中に入つてい

まだ電氣もなく、自轉車も見られず、文化のおくれた島でした。

その当時は物價も事の外高く、エンピツ一本十錢位でした。その頃内地では上等エンピツで、三錢位であつたそうです。

冬になると、家も何も、雪に埋められ、学校へ行くのに、スキーで行き、川や内海は一面氷がはり、氷の上のスケートが、楽しかつたと今でも時々語ります。

春になると一時に草木が芽をふきはじめ、一週間位たつと、あたり一面青々とした川で、アメマスや、イワナ、ヤマベ等をよく釣つたそうです。

夏になると一時に暑さが来て、原野の牧場に牛や馬が何百頭となく放牧され、楽しそうに草を食つている様はさながら西部劇を見る様だと時々語ります。

サケやマスが、川に上りはじめると、川一面水の色が變り、やすでとつたさけの味を忘れることが出来ぬと言いました。

浜べに出て見ると、はるか遠くに白い小さな山が見えるから、近よつて見ると、ホタテ貝のからが、山になつ

ると云つた。父はカマスの中に入つているマルを引き出すとカマスの一部に眞赤に血がついていた、あゝこれは空気銃でうたれたんだと云つておれをおこり始めた。なしてつないでおかなかつたのだ。おれはだまつていた父がじつと死んだマルを見つめていた。その様子はかわいそうでもあり又にくらしくもあつた。おれは来てふるに入つてねた。

ふとんに入つてからもマルの事を思い出すといくら齒をくえしばつてもなみだがでてしようがない。

父の思い出

一 の四 長谷川 清



私の父は大正九年一月十一才にして、生れ故郷四倉町を後にして、叔父の養子となり、北海道千島の國國後郡泊村に三年間越年し、大正十二年九月東京大震災の時に奥父に迎えられて歸郷した。

今では國後島はソ連の領土となつて居るが、その頃は

ており、ホタテ貝かんずめ工場へ内地から働きに来る人達で人口がまし、秋になると皆内地へかえるので、さびしくなるそうです。

十一月には来々四月までの食料品を買つておかないと、越年は出来ないといひます。

冬になると汽船が通わないからだそうす。又土地の名が面白く、泊村の隣、燈台のあるケラムイ、その隣村ゼンベコタン、イカンコタン、ボンタルベツ、サクマンベツ、フルカマツブ、古丹消など皆アイヌ族がつけた土地名だと父が言ひました。

終戦三年後國後島が新聞に出たとき泊村村長梅津と言ふ人の名が出ておりましたので、あの梅津さんが村長をしておつたのかと、過ぎし当時を思い出しく僕にお教えてくれました。

或る冬の朝

三年二組 堀江 修



朝少し早く起きた。顔洗いに冷たい廊下を小走りに風

呂場に行つた。風呂場のガラスには昨晩の風呂のゆげがついてそれが凍つてきれいな氷の結晶が菊の花の模様についていた。湯の温度を計る爲に置いてある寒暖計の目盛は氷点下一度を示している。

外に出た。にわとりへえさをやろうと思つて用意しておいた白菜の残りは、まるで北國から来た野菜の様に凍つていた。私はかじかむ手にはうちようをぶらさげて鳥小屋のある庭にまわつた。おもむろに私はその野菜を切り始めた。少し切ると驚いた事には白菜の白いすじの所からつららを細くした様な細長い氷の柱が出て来た。私は毎日にわとりのえさを切らぬ事はないが、この様な事はめつたにない事なので一寸珍らしいと思つた。私は時々わとりを外へ出す事があるが、その朝もにわとりがあまりさわぐので、切りかけた野菜をそのまゝにしてにわとりを外へ出してやつた。彼女達は池の方に走つていつた。

水のもうとしているのだらうが。しかし池には氷が張つていたので彼女達はたゞ水をくちばしでつついているだけで水はのめないらしい。昨夕にわとりに水をやる

のを忘れたのかと思つて鳥小屋をのぞいて見ると、水のみには半分ぐらいしか水がなく、しかもその表面が凍つていて、その真中が少しくちばしでつつかれてあるだけであつた。私はたまりかねてえさをこねる棒で池の水をつついてみたがわれなかつたので、今度は、菊の花のさゝえにしてあつたらしい竹の棒を引つこぬいて、それで水をたゞきわつてにわとりに冷たい水をのませた。

これがにわとり達にしてやる精一杯の事だつたかどうかは寒い師走の朝の事とて、おそろく裏にまわつて暖かい水を掬つて来ようなどとは考えにも及ばなかつた事である。しかし彼女達のより暖かい体温ですぐに暖まつた事であろう。いすれにしても寒い冬の朝のことだつた。

はわとりの水入が凍る師走かな



うれしい朝

一ノ二五 十嵐 勝美

窓の外がうすあかるくなつて来ました。何時も朝寝の

私が、今日はめづらしく早く起きたのに、自分ながら驚きました。僕は表へ出ました。まだ人通の少い道はなんとなく静かで淋しいです。たゞ水素の音と波の音が、ゴーザーと聞えるだけでした。

空はきれいにすんで、まだ消えきらないお月様がうつすりとの空に残つて、朝早い雀がチチ／＼と鳴いて、電信柱から屋根へとびうつて居ました。しばらくすると急に人通が多くなつて来てラヂオが勇ましく鳴り出しました。僕はいそいで箒で玄関を掃かうと思つて、おもての方をみますと、工場の屋根からお日様が赤々とあがり出しました。僕はしばらくうつとりとして美しい眺めに見入つていましたが、ふと氣づいて箒を持ったまゝの僕は太急ぎでお掃除をはじめました。

僕は今日思いがけなく早く起きたので、いゝ氣持でした。この清い空気をすつて、とてもせい／＼した心持で勉強したらどんなにでもよく出来ると思うと、ほんとに愉快な朝でした。



二年六組 渡邊清美

此んな事では駄目だと氣がついた私は、今年は唯心に誓うだけでなく、はつきりと計画をたてて見た。もうすぐ進學である。來春は待ちに待つたあこがれの高等學校への受験生である。受験出来るか出来ないか今年の勉強次第である。こう考えると何だか今迄のだらしなく遊んでいた事がもつたいないように思ひてならない。計画を立てれば勉強する時、遊ぶ時は遊ぶ時である。遊びの中には、もちろん運動も入つている身体を丈夫にする事には、先ず第一で、健康なくして勉強は出来ないのである。

あ
る
朝

四方の海希望にもえて初日出ず

一ノ四熊谷光子

あ
る
朝

私は急いでげたをつつかけた。水を洗面器に入れて水をまいた。手がつめなくてかじかんだ。ほうきをもつてはいた。とてもつめたかつた。又こたつに入つた。手足を暖めて、また新聞をみた。それから食事をした。私はこんな自分をばかと思つた。

二ノ四沼田尙身

二ノ一穴戸綾子

をがさ／＼と音を立てながら登つて行つた。手前の山の頂上まで行つて今登つて來た所を見下すとの葉はみなまつ赤や黄色にそまつていた。それからものすごく急な坂をころびそうになりながらやつとの思いで下についた。すると美しい小川があつた。川の兩側にはまつ赤に色づんだもみぢがいつばいさいてその色が川の水にうつりそこでもまた秋のけしきが一段こく見られた。

さあ、この山だ。僕は又急な山道を登りはじめた。もうみなあせをかいいていかにもつかれた様子だ。それでも一步一步登つて行つた。とちゆうまでくるとそこにとても美しい廣場があつた。友達の人々がそこにごろりとあお返しになつてねころんだ。するとみんなもそこにねころんで空を見ると秋にしか見られない日本晴だつた。僕はつかれもふつとんでしまうような氣持だつた。

思
い
出

の六ツの時だった。遠くの方はまつ赤にもえ、夜でも明るいくらいだった。縁の下や道路にぼうくうごうをほつて、その中で私達は何度も眠れぬ夜をすごした。ラジオに耳をかたむけ、くうしゆうけいほうと云えばぼうくうごうに入り、けいかいけいほうと云えば皆でほつとするのでつた。夜でも下駄をはかされて、びくびくしながら、ねむつたのです。小さい時で、記憶はうすれているが、六月頃だったろうか、あまりくうしゆうがはげしいので、私は母につれられて、近所の人達とせん川へ逃げた時、途中で、かんぼうしやげきに會つて、登りちやんのおばあさんが逃げおくれ私達の目の前でたおれた時はびつくりしました。せん川へ行つたけれど、ちようどそこえ、ばくだんを落されあやうい所で私達は逃げのびたのでした。その夜は、まんじりとししないで夜を明かしました。朝になつて家へ歸つてみると、家はぶすぶすともえはじめていたのであわてて父が消しました。

お米屋も、學校も、父の會社もやけてしまいました。どこへ行つても、こげくさいにおいがたゞよつてゐる。今考えると、本当におそろしいおそろしい夜でした。

空は灰色に曇つて雲はひくく垂れ、その雲に届きそうに高い老いた松の木の色も黒ずんで見え、ほんとうに寒々とした冬の午後だ。

「こんな日に一人で留守番をしなければならぬなんて……。」

私はもうさつきから何遍この言葉をくり返しただろう私は寂しさを紛わす爲にラジオのスイッチを入れた。カチツク、スイッチまでが家中に響く。ダイヤルを廻してこたつに入つて居ると、ラジオから流れて來たのは私の好きな「ベチカ」の歌。

美しく澄んだ聲が流れ出て、又すぐどこかく消え去つてしまふけれど……。

私は何時のまにかその音楽の波に乗つて、思い出の國に飛んでゐた。

私の小さい頃住んでゐた、満洲のあのなつかしい家にはベチカがあつた。どんな寒い日でも、赤いレンガの家の暖いベチカにあたつて居ると寒さなど吹飛んでしまふ程だった。私は良くそのベチカの前で御伽話を聞き、又唄も良く唄つた。鳩時計の鳩のかわいい鳴聲と共に目を

廣島の人たちは、私たちよりもつとつとおそろしい思いをした事だと思ひます。
私達は昭和二十年の六月二十日に福島縣へこしてきました。その夜はほんとうに皆安心して眠りました。東京の事を考えると小名浜町などは平日の日と同じぐらいに考えられたくらいでしたから、戦争というのは、どんな幸福な人にも不幸をあたえる、おそろしいおそろしい事だと思ひます。

毎日の新聞にもお父さん早く歸つて下さいと云う記事がのつていますが、お父さん、お兄さん達を戦争に取られた人たちは、ほんとうに氣の毒だともいふます。いつまでもいつまでも平和な日が續きますように。

ベチカ

三ノ二 高 木 純 子

今日はめづらしく家中の者があけてしまつて誰もいない。留守番役を頼まれた私が、ぼつんとたゞ一人、縁側に座つてもうさつきから空を見ている。

さまして、それから私達の幼い日の毎日は始まつていた暖い晝の間は元氣に外で、そして冷たい風が木々や、窓ガラスを鳴らして吹きまくる夜は暖いベチカを囲んで楽しい遊びに就けていたあの頃……。

あれからもう何年になるだろう。私もすいぶん大きくなつた。又すいぶん變つた。

小さい時の思い出はいつまでも、いつまでも私達の心にのこつて、こびり着いて、永久に離れる事なく、時にはそれが私達への戒となり又時にはそれが理想ともなつてゐる。

ラジオを聞きながら、「ベチカ」の歌を聞きながら、いろいろの思い出が又考えが私の頭の中を廻つてゐる。ぼんやりしてゐるうちに「ベチカ」の歌は終つて居たけれど、あの頃の幼かつた日の、ベチカの赤い炎が見えるような氣がして私は一人で微笑せざるを得なかつた。そしていつの間にか私は口の中

でくり返してゐた。
雪の降る夜は、楽しいベチカ。
ベチカ燃えろく、お話ししましょ。



星を見て

二ノ三 田 中 忠 彰

冬と夏、春と秋の星の輝きの違いもおもしろい。不思議な事だ。

僕等の目に映るその光はどんな遠い所から来るのだろうと考えると天文学者の考えた事は本当にすばらしいと思う。それに星座の名等考えれば考える程奥にすばらしい。

毎夕同じ所に光つて居る北極星、その廻りの北斗七星その他色々な形にたとえられる。星のつながり、散ばり方など不思議でたまらない。僕等の今の知識ではとうてい判る事の出来ない事と思うとこれから、より一生懸命勉強していくらかでもこの不思議が知りたいと思う。

昨年の七夕には友達と星のあてつこや形の想像などしてたのしんだ事を思い出される。今年はその時いた友達が居ないので少し残念でならない。

星を見て居ると余りに廣く数が多いために夜のふける

のも判らない。

こないだ見た地球最後の日と云う映画を思い出すと胸がしめられる様に苦しくなるが只夜の星座を眺めていると心も廣々となつて行くのをおぼえる。

一番うれしかったこと

一ノ四 清水 和 子

私が珠算を習いはじめたのは、二十七年五月一日である。珠算をやりはじめたのも父の進めで兄が小學五年生の十月に三級を取つて合格したので、ぜひ和子にも三級まで、とらしてやりたいと言ひそれで始めたわけだ。毎晩六時半から八時半まで習つた、珠算の検定が二月、六月、二月とあり、その度に珠算の検定をうけに行き合格したり、しなかつたりした。父によく「自分の努力が足りないから合格しないのだから、この次はきつとうかるようにしなさい」とよく言われた。

昭和二十七年十月五日検定に三級を取りに行つた。珠算の先生が「三級取ると教師のバツチがもらえるが、三

級はなな／＼むずかしいから、よほどしつかりしなければ、合格しない」と言われたので、私はだめだと思つたが、思いきつてうけて見た、試験室に入つてからも、胸がどきどきしていくらくらいかをやつても手が思うようにうごかなかつた。いよ／＼紙がくばられても、はじめの号令がなるまでおちつけなかつた。はじめの号令がなつて、答案を開きやりはじめるとなかなか思つたよりむずかしく、ひとつもはかいかなくて、それでも勇氣を出してやつた。試験が終つて、先生の所に行つた。そして先生が三級を取りに行つた者が、六十五名いる中大体合格者五名ぐらいたそうだとわかれたが私はもうとつくにあきらめてしまつていた。あすの朝に発表があるのだから早く起きて先生の家までき／＼に行つたら小名浜で三名合格し、平で二名合格したとの事だ。先生が室から出て来て清水君おはよう。と言われて顔を洗ひに行つてしまつた。すぐ又来たので「先生三級合格者だれですか」。

ときいたら先生は「清水君、よくがんばつた、合格したのは君ともう二人は男の角田光男という人と本郷宜子という人だけだ、清水君おめでとう」。と言われて先生は

行つてしまわれた。私は暫く沈黙におちた。そしてしばらくしてからうそではないかと思つて、つねつたり、た

いいたりして見た。痛いのがわかるのだから、ほんとうだと思つて一目散に家に歸つて父におしえると父も自分の事のようによるこんでくれた。それから一週間ほどたつてから合格証書が来た。父はこの証書をかくに入れてかざつてくれた。

随 想

中二ノ一 大山 き よ 子



私が学校を歸る途中、級友に行き逢つた。いろ／＼その人と雑談をかわしながら歩いた時その人が今くれようとしてゐる西の空のあなたにゆるやかな起伏を描いてゐる山の黄昏の陽を指さして私になんと美しい色でしょうと云つた。

私もあゝした色を自由自在に出せたらと思つた。私が友だちに「今日のクラブ活動の時間、何を選んだの」ときいたら、たゞボツンと「圖書」と答えただけであつた

「何故圖面を選んだの」ときいたら、面白いからと云った。

「何故面白いの」ときいたら、いろ／＼な色彩を使つて物を自由自在にえがくことが出来るからと答えた。

自分の目的の物をかこうとしている時ほど、楽しい時はないよと云った。

私は本當だと思つた。

本當に自分の好きなことをしている時は大人のみ、にくい争いや世間のきたないことなど忘れて、いつも美しいきれいな氣持でいることが出来るのだから……。

自分で音楽を作つたり、詩や俳句又は繪をえがこうとする人間の心ほど清純なものはないであらう。

人間というこのみにくい中であつて、民族の天才の作品は眞理と共に萬人のものであり、美は永遠のものではないであらうか。

この美と眞理とを求めてやまぬ人間の文藝作品こそ、人間生活に不滅の光明をもたらすものではないであらうか。

空

二ノ五 鈴木 俊 惠

今日は日曜日である。私は家の廊下でじつと空を見あげた。とてもすつきりとして雄大である。あの水色をした空がどこまでもなくつづいていく。私は考えた。あの空のような雄大な空をして、又偉大なすきつた心を人間がもつたら、世の中はどう変わるだらう。きつと平和な空として又、戦争というあのむごたらしいものが、世の中からなくなるだらう。こんな事を考えているうち十二時のサイレンがなつた。そうだ。私達もあの空のようにすきつた心を少しでも持ちたいと、又頭の中に色々と次から次へとうかんで来た。

夜の空まるで黒墨をながしこんだように眞黒い中に星座がめい／＼とばゆい光をはなつている。あの星の所まで地上から何億光年と、かかつていくのだ。それまで人間の生命はあるだらうか。

いやない。人間の生命はせいぜい八十すくくらいまでであ

らう。

空を見ているとこんなことまで考えこんだりする。まるで哲学でもまなんでいるかのようま氣がして、自分ながらおかしく思われた。

春と秋

二ノ二 佐藤 惠 子

氣がゆるむは春、心が引きしまるのは秋、秋は胃の腑が、からになる。が春は頭が、からになる。そうして秋は、春とは全くちがつた陰氣な氣持、悲哀の泉に心がぬれる。昔かう春は花、秋は月と言われている。春と秋の比較は、つまり花と月の比較になるのである。

花も良い、月も良い。どちらも良いが、さてどつちか一方と言う事になると、人によつてちがう。

「つれづれ草」と言う休に「月はさのみ眼にて見るものかわ」と書いてあつた。月は、十五日が満月で、まん丸だが、十六日から小さくなる。花はすつかり咲いてしまつと、散りかける。坂も登れば、きつと下りになる。

先生と生徒

二ノ三 古澤 睦 彦

人間とは面白いものだ、同じ事を考えても小さい時と大きくなつてからとでは考えはまるでちがう。

私は小学校の時も先生について考えた事がある。その頃は先生を特別な人の様に思つた。たとえば私達は先生の思ひまゝにする事が出来るように。それで私達は誰とも思つていた事はなにかして先生に可愛がられたいと、なぜこんな事を云うかという、先生にしろ生徒をみなわけへだてせずに可愛がると云う若い女の先生は小学校では見てこない。

そんな考えを持つている者もいた。これが本当の子供

心なのだろう。こんな経験を持つている私にはよくわかる。それで私はこんな生徒達といつも可愛がられている生徒をうらやましがった。

それが中学校へ来てからはたいぶ違ってきた。学校のしくみが違うからだろう。

そこで考えた事は先生と私達生徒の間を考えて見たら小学校時代の先生を思っていた事がおかしくなってきた。先生は生徒を良く理解し生徒も先生を悪く思ったりしない、そうすれば先生の教をすなをにきく生徒、良い学校がきつとなりたつと思う。

思 い 出

一ノ六本 郷 重 子

敗戦。私達一家は無一物のまゝ、まだ見ぬ故國日本へと引あげて来ました。

私が八つ、妹が五つ、弟が二つの時でした。

父はシベリヤにほりよとして連れていかれ、私達は母と共に父の故郷の竹貫村へ引あげて来ました。竹貫村で母

(私達はびんぼうになつたのでフトンも二組しかなくたのです)。満洲に居る時はお客ぶとんもあつたのにと思つたり悲しくなりました。父のえいようしつちようは思つたり悪く毎日／＼ねていました。

それまで母は私達女手一つでそでねばならないので、その苦勞といつたら口には言いきれないほどでした。

父のご飯は父が歸つてくる前に父にお米をたべさせるためになかから毎日お茶わんに半ばい位づつ残しておいたのです。それで父が歸つて来たときには一俵半にもなつていたので、父にだけはよいご飯を食べさす事が出来ました。

父はいつもすまない／＼といつて涙を流しながら、ご飯を食べていました。約五ヶ月位父は、ねていました、だ

がだん／＼よくなつてお医者さんから、もう働いてもいいといわれた時の父のよるこびよう……

父はそれから職をさがしに毎日／＼歩いていました、そして職がみつからないとしお／＼歸つてくるのでした。

「だが」ある日父が元氣よく歸つて来ました。

そして話すには小名浜にいる父の兄が職をさがしてくれ

は工場のバカマルキをして働きましたので、炊事とか弟、妹のせわなど家の事は一切私が引受けました。

満洲に居る時は日本はどんなにすてきな所かと想像しておりましたが、ゆめに見た日本はけつばい、つづきでご飯も満足食べられず私達は毎日／＼つらい／＼日を過しました。

でも満洲の奉天には山も川も近くなかつたのに竹貫村はすぐそばが山や川で遊ぶにはよいところでした。

私達は二年間竹貫村で父を待つて居りました。ある日母が工場からきちがいのように走つて歸つて来ました。「アスカエル」と云う父よりの電報を持つて、私達はうれしくて／＼泣いてしまいました。

よく日父は夜十一時ごろ親類の人に自轉車にのせてもらつて歸つて来ました。やせてひよろ／＼になつて来るので、ゆうれいの様な父でした。私はうれしさと云う氣持よりもなんだかおそろしいような氣持がしました。

でも父の歸つた事はびんぼうな私達にはうれしいことでした。

其の日は二組の夜具に親子五人でねました。

たそうです。それで私達は小名浜にこして来ました。

一年間ぐらいいは、すこし苦しかつたがだん／＼と生活が豊かになり、母もつとめるようになつたので生活はもとより倍々もよくなりました。

今では母が自分の家に店を出し、私達はせいたくなほどよい生活をしております。



追 憶

二ノ六 小 峰 俊 子

遠いはるか北の國の大連の町から横濱のD町に來たのは、私が物心の着かない幼い日だつた。D町に落着きやがて私も成育すると、仲の良い幼い友達が多勢出來るようになつた。そして更に生育した私の心に一段と記憶深いD町になつた。

やがて私達は、D町になじみが出來ると間もなくこゝへ來た。父や母につれられ長い汽車にゆられて、小名浜へ着いた時は、ただうれしくてしかたがなかつた。

何もかも知らない新しい土地へ来たことが幼い私にはうれしかったに違いない。

無頓着な子供心から……

幼な友達や一つ一つ何らかの思い出のこもっている庭の本立から別れゆくことにも。なんの悲しみも感じなかったのだから。

無理もないと思う！

私は物わかりのやつとついた五才だったし、経済的の心配も別れの悲しみにも一切そんなことには無關心だったのだから。

もう二度と合うことも出来ない幼な友達、

そしてあの稍の下にある屋根の中で、もう再び住むことはないのだ、

やがて家は建ち變り見知らぬ人達が住むことになるだろう。私達はどんなに楽しい時を、あの稍の上で、又影さす下で過ごしたことだろう。

もちろん幼い私がこんなことを考えたわけではない。成育した今の私の氣持なのだから、その後思い出の幼き日を送ったD町は、戦災にあい私の幼年時代の有形の記念

一杯にふくらませて、新しい学園に飛び込み、又戦場に飛び込む。

我々はそこで新しい生活を始める春は我々出発の時期である。この時期を人生に例えれば丁度我々の今だ。

我々青少年は、希望によつて活動し発展すべきである。希望のない青少年は我々の仲間ではない。我々は大いなる希望を持ち、五月の新緑の満ちるような生氣に富まなくてはならない。

我々は年來の重荷である高校進学の試験も迫り亦榮ある入学も、もうすぐである。かえりみれば三年前希望に満ちて本校に入学し、この三年間幾多の苦難を乗り越えて、無事先輩者としての役目を果し、希望に満ちて卒業する。我々はこの三年間、明日への希望を持つて勉学にいそしんで来た。

高校に入つても大きな希望を持て今よりも激しい眞理の追求に勵げよう。

我々青少年は希望を失つてはならない。如何に苦しい時があつても決して希望を捨てゝはならない。

物は大部分は失われた。だが私達によつてD町は忘れることの出来ない年月であつたなつかしい友の思い出もある、

雨水が地にしみて小石や土の間をとおり、

やがて美しい泉となつて湧き出るように。

愛らしい記憶よ！

深みゆく年月の淵をくぐり、淨化されて、美しい思いのみを私達に残してくれるように。

希望の春

三ノ三坂 本 勝

(冬來りなば春遠からじ)と誰やらが言っている。

空つ風が吹きまくり、街は不景氣に満ち、人の顔には生氣がなく、理想も失ひ暗い雲で天地が鎖ざされている。冬はあとしばらくで遠くに消え去り、希望の春がめぐつて来る。

輝やける春がやがて訪れる。

我々三年生も冬と共に學窓を去り、春と共に希望に胸を

冬の夜

三ノ三 高 木 智 子

ある冬の夜の夜であつた。庭に出て空をみているとともきれいな星がいつぱい出ている。だまつて見ているといろんな事を考えさせられる。人間なんてつまらないものだわ。ほんとに小さな虫のようだ。それなのにその小さな虫でもそこには世界があり、世の中があるのだ。星には星の世界があるようにすべての動物にも世界はあるのだ。そのうち、それらのものはすべていつかは死ぬのだ。(死)と云うとだれでもいやだと思ふだろう。ほんとうにいつかはだれでもその死に直面するのだ。

「あゝいやだ」どうして死ななければならぬだろう。この世の中で一番恐ろしいのは「生と死」ということだろう。いつ、どこで？死ぬかしかない。どうせ生きるならばはなやかに、したいものをし楽しく過ごした方がよほどよいと思う何んにもみじめな思いなどなくてもよいのではないだろうか、でもそれは無理な事、遠い夢である

したいものをし、食べたい物を食べていたらそれこそ人間はどうなるだろう。きつと枯れ草がくさつて土にうづまつて行くようになってしまふのだらう。

人間には出来ないものもあるのだ、人間はそれでよいのではないのではないだろうか。苦勞して花を咲かすのと樂して花を咲かすのとは全然別個のことである。人間は常に惡と戰つてゐる。

いつかはきつと花が咲く時期が来るだろう。そんな事をぼんやり考へてゐると柱の時計が八時を打つた。空は相變らず私の考へを聞いてうなづいて笑つてゐるのか、とてもきれいに輝いてゐました。

ノンちゃん雲に乗る

二ノ三 鶴 田 征 子

私が「ノンちゃん雲に乗る」を讀んだのは五月の日のうららかな日でした。初夏の香りを運ぶ風が靜かに吹いてゐる庭の木の下でノンちゃんに乗つたとゆう白い雲をみあげました。本當に、ノンちゃん雲に乗るはよい本で

はかる時間は午後の三時にした。

その日は何回も何回も時計を見たが、なかなか三時にはならない。あまりじれつたので時計の前でこの間買つて來た雑誌を讀みはじめた。日がまともに私の体を照らすので、頭が汗でしめつて來て、本を讀むのもいやになりだした。そうなる小説もおもしろくなく私は腹が立つて、雑誌をほうり出す様に、たたみの上においた。

「あゝあ」と私は短いあくびをした。

さしあげた手も、くずれる様におちた。

上を見たらすこしの間で、天じよう時計、かべを見た「あゝそうそう」私は一人ごとをいいながら、あくびにかすんだ目で時計を見ると、三時はすでに過ぎていた。

ふしぎに思ふのは、時計のならなかつた事である。鳴つても聞こえなかつたのかな？

「あら、私は時計を見て何をしようと思つたのかな？」

私は机の前に立つたもののなぜ立つたかわからない。

「どわすれ」だ。私は、もとの場所の時計の前へ來て考へなおした。

横ですましていた母が「くすつ」と笑われた。

す。かわいらしいノンちゃんのようなすが私の目に見えるよう、私は本を讀んでゐるとノンちゃんとお話してゐるような氣持になりました。ノンちゃんが笑つた時は私も笑いました。

ノンちゃんが悲しい時は私も悲しかつた本當にすなおにノンちゃんの氣持と讀む人の氣持といつしよになることができました。ノンちゃんのおあたかい家庭のようすもでていました。ノンちゃんのお兄さんやお父さん、お母さん、みんなノンちゃんを愛して生きてゐる人たちです。可愛いノンちゃん、私は讀み終つたあととおくすんだ五月の空にふわりと浮かぶ白い雲をみながら、ノンちゃんもきつとあのような白い雲に、乗つたのだらうと思ひました。

どわすれ

一ノ二 小 峰 利 枝 子

私は、冬休み中に、溫度をはかる事にきめグラフを作つて日記の終りにはつた。

部 報



野球部 主將 鈴木 孝

春淺い四月光輝ある歴史を持つ我が野球部は胡宿先生を部長にいだいて野球部の新編成をし苦難の練習を開始したのであつた。

今年度の試合をふり返つて見て其の恵まれざる試合運を回想し、うたゝ悲涙をのむの感を深くするものである。

一、学校対抗野球戦

五月八日から開始されたが、結果は三年は一組、二年は三組、一年は五組が優勝して春の大會を飾つた。

二、対 抗 試 合

植田中学と對戦 六月二十五日(一對〇) (負)
山田中学と對戦 六月二十九日(二對一) (勝)
小名第二中と對戦 六月三十日(四對一) (勝)
勿來中學と對戦 七月五日(六對五) (負)

三、第八方部野球大會

七月二日待ちに待った方部大會の日は来た。胸をおどらせながら必勝の意氣物すく、この大會では見事優勝して磐城日日新聞社の優勝杯を獲得した。

小名浜一中 4 A 對 3 江名中

小名浜一中 4 對 3 泉中

小名浜一中 11 A 對 0 鹿島中

三戰三勝、しかもこの日の中山君はまことにすばらしく投手として活躍しその打棒も物すごく味方を勝利にみちびく主因となつた。

四、郡大會出場權獲得野球戰

七月十三日浅貝野球場に應援團三五〇名にまもられて湯本二中と對戦した。ホームグラウンドの利をもつ湯本二中と遠征の不利、湯本二中の全生徒のスタンドからの應援、承服出来ない審判の判定等もあつて、球運に恵まれず十四回に一点をとられてその裏、問題の一打があつて不愉快な幕切れではあつたが三對二で遂に悲涙をのんだ。かつてない三百五十名の應援團に心から感謝し申譯ない試合をしたことをお説する。

に小名浜二中と對抗試合を行つたがこれは四對一で勝つた。

八、大塚運動具 主催大會

十月十一日平工業高等學校々庭で赤井一中と對戦したが十回戦で一對一の引わけとなつた、規約により抽せんとなり、そのくじに敗れて結局敗戦と云うことになつてしまつた、まづたく言語に絶する口惜しさであつたが如何ともすることができなかつた。球運に恵まれないうより他に表現の言葉がみつからない。一年間をふりかえつてみると、武選拙い野球部ということば言はれるが然し練習にも何か真劍味がなくて數回敗戦の憂目をみた事だと思つてもう一步ふみしめて練習し實力をつけていたならば不運をかこつ必要がなかつたのではないかと思う。自分達の技を練るための猛練習はたしかに辛いものであるがともすると練習を休み先生から言われて練習するとうような錯覺におちいる事がなかつたとは言ひ得ない練習に泣いて試合に笑う！これは言うべくして実行困難な事であるがこの氣持が選手全員本当に分らなければ試合には勝てない事を體驗した。心から野球部を愛して

五、夏季練習

秋の大會を目ざして八月十二日より酷暑を征服して野球の練習を開始した足の裏のやけつく暑さ海水浴を禁じられての苦しい練習であつたが、自分達の成長は見るべきものがあつた。

苦しみほどなつかしい思い出となる物である。

六、菊宿先生の御退職

四月以来熱心に野球部を指導された菊宿先生は一身上の都合で退職された。秋の大會を目前にひかいて先生にお別れする事は非常につかつたが先生は一身上の事なのでしかたがない先生の今迄の御指導を感謝し御多幸をお祈りする。

七、常磐炭礦主催大會

十月一日浅貝球場に於て開催された。必勝を期して出場したのであつたが球運に恵まれず宿敵湯本二中と對戦し中体連の規約を破つて十二回戦にまですゝみ遂に一点を取られて四對三で敗れて暗涙にむせんだ。体育主任の志賀先生、新しい野球部長の猪井先生の熱心な日頃の指導に對してまづたく申譯ない試合ぶりであつた。十月六日

下さつて御指導御應援下さつた諸先生先輩の諸兄同級生はた又下級生の諸君に心から感謝すると共に来年こそ大いに一中野球部の名をあげて下さるようお願いする。本年度活躍したメンバーは次の通りである

1 番	松原 忠利 (捕)
2 番	中山 章 (投中)
3 番	鈴木 孝 (遊)
4 番	松原 芳弘 (三)
5 番	柴田 定 (左)
6 番	野木 東太郎 (一)
7 番	齋藤 忠正 (中)
8 番	齋藤 善四郎 (投二)
9 番	布 施 哲男 (右)
補欠	小野 宏
	鈴木 征治

陸上競技を顧みて

陸上競技部 主將 蛭田 選一

我校は陸上競技に於いては、四年連続優勝という郡下各中學校には見ることも出来ない記録をもっている。

前年の郡下陸上競技大會は好間村で行われた。この大會は、好天氣に恵まれグラウンド外には、多くの觀衆をあ

つめて盛大に催されはなばなく幕を閉じた。

我々は、皆調子良くスタートした。齊藤君の百米十二秒六の好記録(第一位)を初め、決勝で五種の差で二位に落ちた木村君(三段跳)準決勝で大会新記録を破る好記録を出した四白の柴田君砲丸の大半君も良くリードして五位、走高の渡邊君はコンデーション悪く一位入賞の予想を破つて六位に落ちたが、呼び物の八百リレーではみんな良くがんばつて一位、自分も走巾に出場し五米十六で第一位をしめた。

女子選手もよくがんばり、優勝候補の川部中を破り、堂々四年連続優勝の栄冠を確得したのである。

又前年十月に福島、山形、宮城の三縣で行われた第七回國民体育大会に出場した(天らん試合として)

出場者は斎藤、柴田、木村、蛭田、楠中山の五君である。

この日は、観らん席には天皇、皇后を初めとして數万の觀衆の眼前でしるぎを挙げつた。

縣下から集つた強ごうをしりめに、若松、白河(五ヶ所)中に續いて三位に入賞した、その記録も一分四十八

また努力、チームワーク、その競技に對するしんけんさが必要と思う。最後に私達のあとに續く競技部員の諸君に御願ひする我々は前述したように、四年連続優勝のかがやかしい記録をもっている。その記録をけがさず、五年連続、大きくは十年連続優勝の夢をいだいて、努力されることをせつに願うしだいである。

排 球 部

主 將 石 井 美 沙 子

○月○日

ウ……と放課のサイレンが鳴り響いた、急いでお掃除をすませて身仕度を整え校庭に出た。

準備運動をしてバレーの練習に取りかゝる。

毎日練習をしているのだがなんとなく楽しい、でも一生懸命やつてもうまく出来ないとなさけなくなつてしまふ、しかし私達は試合にはかならず勝とうという意氣込なので張合がある。

去年のバレーは都で勝つて福島まで行つていたのでその

秒二という好記録であつたが、出發前夜ラストを保持つてレギラーの布施君が、盲腸で突然入院のため欠場したことは吾々チームの最もいかんとする所があつた。

もし布施君が健在であつたなら優勝は不動であつたらう、ともあれ予選決勝を通してトップランナーの齋藤君の見事なランニングは觀衆をして興奮せしめるに十分であつた。

しかし、この優勝入賞のかけには、日々に吾々の指導にあつて、はげまし、氣あいづけて下さつた、志賀、稻川兩先生をはじめ諸先生方、その他櫻井、石井、布施先輩には、吾々競技部員一同感謝にたえないしだいである。又我々競技部員の、熱とねばりと協力とチームワークの一致が実を結んだ結果であると私は信じます。

陸上競技生活の反省

陸上競技に於いては、走る事だと、本あるいは、先輩の方から聞きましたが、そのとうりだと思ふ。

どの種目をやるにしても走ることが一番大切で、走る事によつて、バネが生まれ、ねばれる力が出て來ると思ふ。

名をけがさないようにしなければならない、もう試合も間近いので皆汗まみれになつて練習をする、あたりが暗くなる頃最後にサーブが入れば終つても良いと先生が云うとがぜん皆活氣づく、そしてその日の練習も終り家につくと空腹を感じ家に入るなり食物のさわぎをするのでいつも家の人に笑われてしまふ、さあ今日もおそい明日も張切つて練習をしよう。

○月○日

いよいよ今日は試合日だ、でも今日は方部大会なので先生は心配はいらないという、でも私達は胸をふくらませて試合場である泉に行つた、泉についたのが私達の学校が一番最初であつた。皆身仕度をして校庭で練習をする。なんとなく胸がわくわくする、間もなく全部の学校が集つたので開会式が行われ小名浜が先頭に立つて校庭を行進した、さていよいよ試合が始まり最初に私達は江名と組んだ、私達はまだ試合にはなれていなかったの思うように試合はかどらなかつたがまづ一回戦は勝つた。次は鹿島と組んだがあつてなくやぶつてしまつた。泉、小名二中とすばらしい成績で敗かしてしまつた。今日

も皆調子が良いのかサブは入るしタッチはきまる、しかも優勝したので鼻が高い。さあ今度は郡大会があるのだ郡大会に優勝しなければと思うとじつとしていられない気がする。泉からの歸りにはつかれもなんのそのと意気よう／＼とひきあげたが心の中ではさあこれからだという気持ちでいっぱいだった。家に歸るとうれしくて試合の様子などいつまでもおしやべりしていた。

○月○日

今日は郡大会だ空もからりと晴れあがり、絶好の試合日和である、今日こそはと日頃練習した腕を十分に發揮するのだ。優勝カップは私達の学校にあつたのでカップは今日返さなければならぬ、私達は汽車の中で必ずこのカップをもう一度もつて歸りましようと話合つた。

試合場の四倉へつくと他の學校はもう來て練習をしていた。練習を見ていると胸がはづんでくる、開会式も終りやがて試合がはじまつた。今日は方部大会と違つてそれぞれ方部から選ばれた強いチームばかりなので少しこわい氣もする、私達は中衛センターの掛聲も勇ましく試合をした、しかし今日は皆調子が悪いのなかなか試合が

きまらなく始めから苦戦だつた(後で考へると樂に勝てた試合だつたのに)そしていよいよ最後の決勝戦になつた、今度は手ごわい赤井である。さて試合をしてみると赤井はなんといつも強く私達はどうも勝ちそうもない。先生の掛聲にはげまされて最後までがんばつた、しかしいくら私達が一生懸命やつても赤井にはかてなかつた。しかし私達は敗ても自分達の力を十分發揮し最後まで戦つたのだ「來年こそはぜひ赤井からカップをもう一度小名一中に取りもどそう」と意氣込んで、もう中學校は卒業である。

今までのことを考へると練習はつらかつたが樂しかつたことだけが思い出される、先生もすいぶんつらかつたろうと思う。

來年は來年の人達がバレー部員として活躍してくれるだろう



卓球一年間を顧みて

主將 笹原政義

私達卓球部一同は、我校小名浜一中の名譽にかけて、又我々の心身をよくきたえるためにつくして來ました。

我校又私達の名譽にされる点はYSP大会、並にニツタ杯、郡大会において一度も敗戦せず、全優勝と云う功績を残した事であろう。では一体、何が小名浜一中を全優勝させたのだろうか。それは、普通人の考えるなまやさしさではない!! 皆さんにも想像つかないほど、努力に努力を重ねて來たのであります。

私は一年間をふりかえつて見て、一番心に強く感じたことは、我小名浜一中の選手は、意志が強く、忍耐力があり又チームワークが、取れていたと云う事が、一番全優勝をなした原因となつた事、又一中のキャプテンが、しつかりして、他の選手は良く云う事を実行したと云うことであると思う。

私達の苦心は、なみだいていのものではなかつた。他の

競技部もそうであつたらう。休みの日も、雨の日も、風の日も、全員男女共練習にはげみ、又はけましかつて、なぐさめ合い、一日一日全身の力をこめて、研究をつづけて來た。練習中のあの顔、この顔に汗がにじみで、髪をうつとりとたれさげながらも練習をつづける選手には、何か大きな希望にあこがれている様子がはつきりと今でも目に浮かぶ、練習をしている時は、無我無中で球ととりくんでいる。やがて、練習を終つた時の氣持のよさと云つたらなんとも云えぬものだつた。私達は日に日に上達してることが、非常にうれしく思われた。このような苦心がとうとう實を結び昭和二十七年の幕を閉じたのである。

試合に於ける感想

昭和二十七年度石城郡下中學校卓球大會この日一中チームは不調であつた。しかしその時の試合には期待されなかつた選手が意外にも好調であつた爲、熱戦を展開した。尙当日は陸上、テニス、卓球部等皆一中の優勝となつた。

ニツタ杯争奪卓球大会

昭和二十七年十一月十六日、此の試合には、一中は男女

共A、Bチームが出場した。男子Aは調子良く上進し、決勝に向つた。相手方は好間中仲々の強敵一中が苦心して考えた戦法が見事成功、ついに男子は見事優勝をなしとげた。

女子Aチームも男子と同じく好間と對戦し、大奮戦をしたが、一中チームはねばりが強くおしくも二位の成績をおさめたのである。

「YSP」杯争奪卓球大会

ニツタク杯と同様で男女共二チームづつ出場、男子Bは一回戦でおしくも敗戦。

女子Bは全員不調の爲全敗してしまつた。

男子はトーナメント、女子はリーグ戦であつた。男子Aは一回戦に平三中と對戦この日一中は全員ふるわず、あやふく敗れるところ、しつかりしたコートによつて二對一を二對二對に持ちこみ「火をはく熱戦」を展開した。最後の山本キヤブテンが、不調だつたのがこの燃える一戦に巻きこまれて調子を取りもどし軽く相手を敗り、決勝に向つた相手方は又も好間中、相手の弱点を見抜た爲軽く勝てた、これまた一中の勝利となつた

「反省すべき点」

「一中は試合には強い學校である」。

だが反省すべき点がある。それは云うまでもなく道徳心に欠けている所なのである。

これは我々卓球部員はぜひ考えてもらいたいと思います。試合中、練習中最も注意すべき事であつたと思う。

今度昭和二十八年年度の卓球部員は、これらのことを反省しなくてはいいかと思ひます。試合に勝つことが目標とされ一番大事なのであるが、それよりも相手を尊敬しあい、自分の人格をみがき精神的にも社会的にもおとらぬ人間になるよう努力しようではありませんか。

ソフトボール部

主將 岡 部 弘

私達は五月中旬、一ヶ月半後の試合をめざしてソフトボール部を結成し、こつ／＼練習をつゞけた、放課になるのが待遠しく、炎天下真黒になつて練習に練習を續けた。雨や風の強い日は練習が出来ず物足りない氣持だつた。

願する。

テニス部

主將 峰 松 武 一 郎

一日／＼と試合はせまり「私達はこんなうわついた氣持では駄目だ、もつと練習に身をうちこまなくては」と思いながらも眞夏の太陽はようしやなくじり／＼と照りつけ、氣持がゆるみがちで、ともすると木影に腰をおろしたくなつた。しかし私達は、そんな事には負けず、日曜にも我先に道具を出し先生の指導を受け、元氣一ぱい練習にはげんだ。

いよいよ七月二日、第八方部の試合當日である。皆なんとなくおちつかぬまゝ會場へといそいだ。

……試合の様子は……

一中31—21鹿中 二中9A—8一中 泉中9—0一中

鹿中との試合は樂に進めたが、二中との對戦は同点にて延長戦に持ち込んだが、二中に一日の長あり一中の打力振らず、ついに惜敗した。泉中には二中との疲れも出、惨敗を喫した。

終了後、歸校の途中皆で話し合つたが「練習不足」の一語だつた。

ふりかかつて見て、スポーツには練習が第一だという事を痛切に感じた。來年こそ頑張つて下さいと在校生にお

我々庭球部は八月の郡大会を前にして暑い／＼毎日を一生懸命に練習に練習を重ねた。練習があまりにもつらいのでやめようかとも思つた事もあつた。しかし我が母校の事を考えるとやめることは出来なかつた。やがて待望の試合日がやつた來た。くつきりと晴れ上つた青空に眞白なラインが引かれていかにも郡大會と云う感を一増深くした。入場式が行われた。

いよいよ試合開始、男子はABコート、女子はCコートでそれぞれ試合が進行された。

我々は一番最初に湯本二中と對戦の豫定だつたが湯本二中が棄權したので第一戦まず不戦勝となつた。第二戦は

勿來と對戦し三對〇で破り決勝に進んだ。決勝は平二中、平二中と我が小名一中が残り、リーグ戦がこの三チームによつて行われた。初めに強豪平一中と我が小名一中が對戦した。廣野、上野山組が敗けたので手強いと思つた。次に蜂松、大瀧組が出て大將チームと當つた。一セット二セットと取られてしまつたので危かつたが三セットからは立ちなおり、このセットはものにして四セットに入つたこれも追い込んだがとられてしまつた。

いよいよ敗けると思つたが敗けてはならないと思ひ四セットは軽くものにして五セットものにして三―三と追ひ込みファイナルゲームに入つたのでほつとした。このゲームでサーブの一つ一つにワアツという歓聲、いよいよ慎重になり好調になつて來たのでうれしかつた、このゲームも取つてとうとう四―三と勝利を得た。

この時は涙が出るほどうれしかつた。近内、峰松卓組が勝つたので二―一の勝利となつた。次の平二中との對戦は平二中が棄權したが平二中の大將組と峰松、大瀧組の模範試合をやる事になつた。この試合で僕がくさつてしまひ敗けてしまつた。しかし我が母校小名一中の頭上に

籠球部

主將 遠藤 福子

籠球部員として、今年をふり返つて反省を述べさせていただきます。まず最初に籠球部員の増加。

昨年（昭和二十六年）中には男六名（廣原F、池田F、五十嵐C、鈴木G、駒木根G、柴田G）女六名（櫻村F、

清水F、丹野C、黒澤G、鈴木G、遠藤G）計十二名の部員にしかすぎなかつたが今年は男子十一名（柴田F、丹野F、小野（光）C、堀越G、木村G、加藤、金成、小野（久）、遠藤、小松、遠藤）女七名（須永F、手塚F、遠藤C、長瀬G、江尻G、村上、田中）計十八名、昨年の約一チームが増加している。この増加によつても、わかるように籠球部の發展又部員の活動はいかなるものであつたでしょうか。第一に云うまでもなく、この競技はあくまで団体競技なので、チームワークが大切。これが団体競技の根本的なものである。

それでは第一回六月二十五日までの練習ぶりを簡単に述べることに致しましょう。昨年中は濱通り小名浜、江名の二チームの参加で、優勝した所で郡大會出場権を持つ事になつていたので。江名中にいくらかの差で敗れてしまつたのである。このため昨年の部員又今年の部員の意気達は筆舌に表すことも出来ぬ大きな優勝を目当てにして、じわり／＼歩み進んで行くのでした。この結果六月の第二回試合にはみごと優勝し全勝して來たのです。参加チームは三チームのためリーグ戦で行ない、この結

果全勝をしたのです。第一試合には小名一中對江名中の試合は昨年にはくらへることも出ず進歩、先生方も驚きの聲を上げぬばかりでした。第二試合は小名二中對江名中との試合は又もや江名中の敗、江名中の油断であるかはすぐおわかりの事と思います。第三試合は小名一中對小名二中との試合、この結果はタイムのない試合になつてしまつたのです。タイムが過ぎ去つても試合は續くし、二中は試合好調一中は点数にあせり、この二、三分間の試合は述べることも出来ぬ試合の様子でした。この結果審判の先生方の不注意のため二中の好調にタイムが來てしまつたので一中の勝、このため全勝男子の喜びはいかほどであつたでしょうか。私が男子ならどの様に感想を述べていいのかわからないです。男子一。二人の友達に感想をお聞きますと第一人者は昨年の「カタキウチ」をうつたので嬉しい、昨年の人達の願ひの責任を果して本当に嬉しい。又第二人者に取つては「なんだ！軽く勝てるではないか」。と、さも自慢そうに答えた。でも試合の結果私には次の様な反省を述べる事が出来る。

③チームワークの一定

◎出場した結果は必ず優勝する

◎悪質な試合は行なわない

この三つが一致して優勝する事が出来ることと思われま
す。それでは、自分自身の事かもしれないませんが、試合に
はよくスポーツマンシップ／＼と口ぐぜの様に皆さん方
からも云われておりますが、このスポーツマンシップと
はいかなる事なのか一口に述べることに致します。これ
は試合は勝負にこだわらず、あくまでゆかいに、ほがら
かに、明則に又ゆかいに力のあるかぎり行なうというの
が目的である。しかしながら勝、負はかまわず只「やれ
ばいいのだ。」これでは試合に参加したねうちがあるの
だらうか。私にとつては毎年あるところの学校對抗であ
つて優勝旗又カップまで出そろつてゐるのに、私いや僕
は優勝はかまわないといつてチームワークから一人抜け
出す、そこでチームが乱れる！でも自分の力のあるか
ぎりつくしても勝てる事の出来ぬことは、相手が強過ぎ
ることと考え又反省して私達の未來の友に對し練習の上
に練習を重ねていかななくては優勝が出来ないと強く感じ

られるのです。

次に第二回試合は郡大会に當つております。

六月も半ば過ぎ試合日までは一ヶ月位の日数なのです。
郡大会に参加する間の練習ぶりを述べる事に致しましよ
う、二区では優勝したのだから郡大会にも優勝出来るこ
とであるかのように日々皆一般に練習が欠けてきた様で
した。温度も上り、いまままで通り練習する事も出来ず。
朝夕涼しい時に行うしかないわけです。

朝は七時から十二時まですると、ことに暑いから私は
休む、僕も休む十分間もやらす日陰、木陰に歩み進んで
行く。でも一人が暑い時にはお互に皆な同様である。休
みの構造も同じ又同じ物を食べてゐるのだから先生方も、
もちろん暑い事でしょう。夏休みといえは練習よりだれ
でも海の方が好ましくなる。暑いのを幸に早目に終り、
海に行くからには水泳ぎも行ふ。先生としても優勝もさ
せたいし又皆さんを海にもやりたい。でも「試合まで
はフオームがくずれるから水泳ぎは終つてからにしてく
れ。」吉田先生もこの言葉を言つて、いない日はおそ
らくなかつたといつても良い事でしょう。昨年中は水泳

合か／＼とため息をつくしまつてす。

に行く様子もなく又先生に云われなくてもお互に試合ま
では「水に入るなよ。水泳ぎするのではないよ。」と私
達個人／＼で注意し約束を守つたわけなのですが、今年
はどのくらい水に入り、水泳ぎをしたものでしょうか！
夕方の練習になると水泳ぎの後なので、体も疲れてい
るし又休もだるい、練習は先生も指導をかねて「男女試合
をやつてみる。」試合をやつても互に「作戦」でも組ん
でゐる様によく動かない。これが毎日／＼重さなつてい
くしまつてす。それでは参加チームを述べることに致し
ましょう。男子十五チームは次の様な組合せでした。

第一試合：赤井二中對好間中、第二試合：江名中對上遠
野中、第三試合：内郷一中對湯本二中、第四試合：磐崎
中對小名二中、第五試合：植田中對平三中、第六試合：
小名一中對湯本一中、第七試合：内郷二中對平二中又女
子チームの組合せは第一試合：内郷二中對赤井二中、第
二試合：平一中對、小名一中第三試合：内郷一中對湯本
一中の様な組合せでした。

女子の昨年の成績は二位となつてゐるにもかかわらず
、男子にしてもいまになつて自信がなく、「明日は試合

男子の方も一試合で敗れた。

いくら泣いても、ほえても今では遅い、只皆が沈黙
／＼したまらかけてゐる情景——この情景を現わすことも
出来ず一室にとじこもり應援の友達、先生方もあきれた
様になんといつていいのか、本當に述べる言葉一言さえ
わいてこないのです。皆様方は只あの一室の様子が目の
前にあり／＼と今でも思い出されるのです。この結果を
持ち私は只頭に浮びあがるのは練習態度なのです。
もつと／＼練習をしつかりやれば良かった。試合後では
すでに遅い。部員の皆さん勝つことには練習が必ず必要
です。

練習もやらす勝つ事は出来ません。

それではいかに練習をやるべきかちよつと述べることに致します。

(1) 個人／＼がお互に自信を持つこと。

(2) 蔭ひなない人になる。

(3) 時間を有効に使うこと。

(4) 試合に出場したからには勝つという自信を持つこと。

(5) 休むことのないよう。

この五つの事項は個人／＼が持つべき事項なのです。

部員の皆さん出来る事なら一日も休まず自分自身の力をみがくことです。努力と練習を重ね立派な試合をして下さい。先生が御指導されなくても自分達で協力して又先生のお教えを良く守り私達より以上の成績をあげて、下級生の部員の皆様方も一年をかりりみて何一つ反省がないと云われるまで一人一人努力し又協力によつて籠球部優勝の額をにかけて下さることを思われます。

皆さんやればいかなる事でも出来る。出来ぬと思えば出来ず優勝すると思えば優勝出来る。部員の皆さん昭和二十八年度には必ず優勝することを強く約束しておきたい

。勿論希望した生徒全員で編成したのですが残念ながら男子は一名も希望者がありませんでした。女子だけ五十名集まりました。先ず発聲の基本から始め、音程練習、和音訓練と基礎から一步一步進んで行きました。五月末には三部合唱がきれいに出来るようになりました。九月七日に縣中小校音楽コンクール平地區予選會がありました。

これは七月に予告されていまして夏休み中も一週間練習したのでした。しかし結果は選外に落ちてしまいました。勿論入賞しようなどとは始めから思っておりませんでした。たゞこのような会に参加する事によつて一つの経験を班員にさせようと思つたのでした。しかしやはり落ちて見ればあんなに練習していたのに、とみんなガツカリしました。はじめての舞台でみんな上つてしまい、ふだんの実力が発揮出来なかつたのです。無理もありません。ハイフェッツ（現在世界第一のバイオリニスト）でさえカーネギーホール（ニューヨークにある世界一流の演奏家のみ出演する演奏会場）に出演する時は上つてしまつて気分が悪くなると云つています。そこそ十月に全國唱歌ラヂオコンクール豫選があると云う通知が来

のです。

先生方も又生徒の皆さんもぜひ努力と協力によつて昭和二十八年度の優勝をとけて下さることをお願い致します



音 樂 部

K ・ T 生

我が校の音楽部として特筆すべき事柄が二つもありました。その一つは専門の優秀な先生を迎える事が出来た事。この事は我が校の生徒諸君に取つて大變幸福な事だと思ひます。もう一つはPTAの協力によつてスクールバンドと組織出来た事です。音楽部は従つて合唱班とバンドと、二方面に活動しました。今年度歩んだ道をふり返つて見ましょう。

四月に三年生の女子を主体として合唱班を編成しました

ましたので、今度も入賞は望みませんが参加する事にして早速課題曲の練習を始めました。十月十二日平一小で開かれた豫選會に出場しました。人員が三十名と制限されましたので、残念ながら練習しても出場出来ない班員もありました。演奏が終つて順位発表の時以外にも第三位に小名浜一中の名が呼ばれました。班員の喜びは大變なものでした。この時の賞状は職員室にはつてあります。

その後班員が三年生ばかりなので、いろいろ忙しくなり活動出来なくなりましたが、十二月に入つて毎週月曜日の六校時がクラブ活動の時間となりましたので今度は三年生のみでなく各学年から音楽の好きな生徒が集つて来て毎週一回楽しく練習しています次にバンドは楽器が全部で十二個ですので十二名一年生の希望者の中から選んで班員にしました。みんな生れて始めて持つ楽器です。

思つたよりむづかしいので途中でやめたりして班員も何回か變りました。十月以後はもうやる者もなくなくなり、やつと班員も一定して落ち着きました。全くはじめて手にする楽器ですので持ち方も解らないのでした。先ず持ち方、息の出し方、くちびろの形それが一通り出来て

樂譜と指使い、音階が一通り吹けるようになったのは五月でした。指使いを覚えて、その通りおさえても仲々樂譜通りの高さの音が出ません。しかし漸進的に上達して来ています。八月二十三日縣体小名浜会場開會式にはじめて公衆の前で君が代を吹奏しました。九月の体育祭には君が代の他校歌と行進曲を吹奏しました。十二月七日湯本一中で郡下でバンドのある中学校（四倉、湯本一中、小名浜一中）が集まつて小演奏會をやりました。模範演奏としては平商高バンドが數曲演奏してくれましたが、態度其の他立派で非常に参考になりました。目下三月の卒業式に吹奏する「仰げば尊し」と「螢の光」を練習しています。來年度は二、三樂器を増やし本格的な曲をやり度いと思っています。

以上本年度の我が部の歩んだ道をふり返つて見ました。最後に、このように順調に歩んで来られましたのも、みんな音楽部以外の諸先生方の絶大な御理解と御協力があったればこそと深く感謝致して居る次第であります



×組でも手紙の書き方を勉強した。中にこんな手紙があつた。

「F君、ぼくはなんぼ勉強しても君のように上手になれない。その代りぼくは毎朝早く起きてあつちこつちにパンを配達している。ぼくにいつも字を教えてくれてありがとう。この温かいパンを冷めない中に食べて下さい。」とあつて相手の宛名のそばに皿の上に温かそうに湯氣のたつパンをのせた繪が書いてあつた。
何んとその手紙は焼きたてのパンのように香ばしい匂ひのことか！

(3)
私も人にすゝめられるまゝ、始めて髪にパーマネットをかけ、セツトして貰つた。案の定、珍らしいので人々はさまざまの評を下すのであつた。やがて朝會になるので外に出た。

晴れ上つたよい日であつたが、全校生徒の目に自分の頭がさらされているようで私は柄にもない出来心を後悔し始めていた。その時、つと一人の生徒が側に寄つて来て口早に、さゝやくような聲でこう言つた。



交 流

河 原 田 ハ ル

(1)
秋に近い或る日の夕暮た時、私は獨りで街を歩いてゐた。

「先生!!」と呼びかけられたので振り返つて見たがそれらしい人と見えない。また

先生!! と呼ぶ聲がする。今度は立ち止つてあたりを見まわした。とすぐ側に止まつていたトラツクの下から油と汗に塗れたシャツを着た青年が這い出して来た。卒業生○○君であつた。折柄雲の切れ目からバツと夕陽が○君の顔にあたると○君はまぶしそうに目を細めてニコニコと笑いながらもう一度、

「先生!!」と言つた。

(2)
「先生、頭派手だぞい」前の年擔任した○君であつた。私は眼の奥にじんと熱いものを感じ、そこに立ちつくした。

○君も今は高校生である。暫らく會つていない。見上げるように背が高くなつたという。

(4)
その生徒の名はその人となりのように優しいのだがこゝではM子さんと頭字だけで呼ぶことにする。M子さんは時間中、私の話をいろいろに噛みわけ、それぞれの表情でうなづきながら聞いているのである。たとえば「先生それはよく分かりました。先生これはこれでいいんですか?」とでも言っているように。組主任の先生も同じように言つておられたからどの先生の場合でもそうなのであらう。M子さんのような生徒は先生にとつては時にこわい生徒であり又誰よりも頼もしい味方なのである。

(5)
ノートを検査した。S子さんがノートの余白にこんなことを書いていた。「先生、今度は少し上手になつたで

しよう。よつと見て下さい。」S子さんのそういう聲が聞えるようで私は嬉しくなりもう一度そのノートを開き直した。成る程前のところよりも上手に書いていた外の生徒はこうは書かなくとも思ひは皆このS子さんと同じであろう。それから後餘りに上手にかけていないノートは私の微笑を誘うのだからかな油断もさせないのである。

(6)

×組は今日始めて詩に入る。尾崎喜八の秋の流域である。元氣が好すぎるので評判の高い學級である。

「投げてしまわれるのであるまいか」私はいさゝか心を構えて讀みに入つた。

なんとS君の抑揚の適切さは！

U君の音聲の張りはい！

Gさんは靜かに讀んで味を深め、

日子さんはさらさらと讀んでしかも人々を詩の情景の中にいざない導くのであつた。生徒たちの繊細な感覺と、意識の純粹さに私は壓倒された。

無口だと思ひ込んでいたT君

二十五年の春希望に輝いて海技免狀を胸に懐しい母校を巣立つてより半歳。十月の初旬とは云へ、高氣壓のそる／＼東北地方を見舞う時期となりました。その年は未だ鯨魚群もトド崎五百二十哩東邊りに影を残し、終漁期乍ら活況を呈して居た年でした。私の船も十月二日氷食糧その他日用品の雜多を満載し母港氣仙沼に巨体を浮べ、明日の出港準備も満了し風に起つ漣を舷にさへ靜かに當てて居ります。港内にどつかと腰を下した巨体を見ると船が、沖に行つて木の葉の様に揺られ怒濤さかまく大洋を魚群を探求し続け耕洋に努める等と全く夢の様に思われぬものがあります。出港祝の御酒も二本神棚の前に樽も今新しく取り換えられたのかと思われる程の縁を映し、奥の方には安全にそして大漁を祈願する御札が五、六枚きちんと整理されて尊嚴そのものの感が與えられて來ます。私も弱輩の年々責任重き航海士の任を得、次期航海の大漁を一途靜かに祈願したものでした十月三日未だ明けやらぬ薄もやにとさされる四時主機が掛けられて全ての夢は驅破られ再び騒々しい活動が展げられました。錨を捲く音をして人々の甲斐／＼しく働く

豪傑の名も高いG君

もつさりやのY君、等、等、

みんな、私をたじたたとさせる程、高い詩の精神のしぶきを惜し氣もなく明かるい教室に撒きちらしてどこまでも屈托がないのである。おかげで私は秋の流域に立ちながら美しい詩のしぶきを浴び、すつかり幸福になつてしまつた。

(一九五三、一、一二)



海の生活

猪井廣文

現在校長先生始め諸先生の御指導の許、一教職員として籍を小名濱第一中學校に置いて頂いて居るか、誰もが知らないとして胸中に秘めた楽しい海の生活の過去を私は抱いて居る。そしてその一端を此處に披歴し將來水産の道へ進む若人の爲、參考として頂ければ結構だと思ひます。

姿。然し空を見ると夜半から吹いた風がどことやら無くなつて、出帆旗が心良く翻つて居ります。あたかも大漁を祝するかの様に。四時二十分錨揚げ終り愈々出港。波止場で手をかざし見返る人人出港合圖のサインも尾を長く引き、十数日余の別れを惜しむかの様に聞えます。唯陸の人となぐものそれは船尾から吐き出されて残る白い線の船跡ばかりです。手に手に持つハンカチそれも段々小さく、そしてその影も見えなくなり名残り云うよりも別れ、毎航海年々味わうにもかゝらず、今日より十数日の間陸地との御別れかと思ふ時、一入の淋しさが溢れて來ます。だがそれも時間の経過に伴ひ薄れ、反對に勇氣百倍、今度こそは心残り無く大漁して歸るぞと吾が胸に吾年々聞かせるのでした。唐桑崎通過より針路細浦港へ。港外へ出ると昨夜來の風の強さを物語る様な大きな波が岩壁に打ち叩けて居る。その波の爲巨体が大きく揺り初められる。もう甲板には人影もなく唯操舵室では當直の人が、黙々と舵を握つて居るばかりです。私も船体の動揺に身を任せ年々出帆旗の片付け方、海圖の整理等を済ませて寝台に横たわりました。何を考える

とは無く、ところと夢見る事二時間、當直に起されて甲板上に出て見ると、目前にはもう細浦の大自然の美しい眺めが大きく吾を待つ様に迫つて居ました。

二三隻の大型船が黒い煙を吐きながら轉々として餌料(鰯)をいけて居ます。私達の船も港内に入り餌屋との連絡もつき船を餌わくに着けます。昨日中に終了して居た準備もその一つ一つが役立ち餌をいけ初める。鰯を追つてたものの中に入れる者、バケツで鰯を汲み取つて次の人に渡す者。手渡しで船内の箕に入れる者。又大型船と餌わくの中間に置いて餌を汲み取るのに必要な傳馬舟を動かぬ様に持つて居る者。ロープを引張つて居る者。時々どなり散す大聲。總てが仕事の迅速を計る爲の甲斐／＼しい活動振ります。本船は二百十位の餌を持つ。だが一度に全部の餌をいけるわけには到底行かない。半分位の餌をいけては箕の中の水を新鮮にする爲巡廻しなければならぬのである。箕中では今入れたばかりの鰯の頭を半分位空氣中に出し泡を集め乍ら、苦しがつて居る。長時間此の様に居ると鰯は全滅になつてしまふので巡廻するが、二三十分するのが普通とされて居る。此の

張り台からの傳言により魚群の大きい事を知つて無我無中になつて釣る。腕に覚えのある事ぐんぐんと力を入れては船内に鰯を抛り込む。じたととカッパの中が濡れて来る。初めはカッパがむつたのだとばかり思つて居たが身体から出た汗の爲だ。何時間経過したろう。船体のぐつと横に傾斜するのを覚えて、あわてゝ魚の冷凍に初める。見張り台からは思つたより大きい魚群である事を知らせて来る。えら／＼した氣持で冷凍も止め今度は傾斜する反對側に鰯を寄せて釣り初める。勝負は一分の暇とて許されない。約七千貫は釣つたらうか。足の踏む場所も無く魚の冷凍に掛る。吃水線の深まつた報に力一杯の作業は續く。文字通りの目間苦しい多忙さである。船は重い足で新しい魚群を追尾し初める。追尾捕獲冷凍の連續。間に合はず乍らも餘念なく釣り上げる。船長に船が危い傾斜が大きいと云われて冷凍し初めた時はもう日も大部傾いた三時頃だつたかも知れない。炊事係からはにぎり飯を渡されて食べる。朝から食無し。勿論時間の経過等は意識が無い。二班に分れて冷凍しやつと先が見えて来た時は船中一杯に点燈され海面に影が映つて居る

様な事を繰返し餘す數も少なくなると沖に出港の準備が初められる。九時半出港。餌屋四五人の人々と鰯に見送られて出港する。後を追つて飛んで来る鰯の數が少なくなる頃、年老いた餌掛りの人が熱心に、今いけて来た餌の様子を見て漁撈長に報告する。

漁撈長より針路を命ぜられて當直に申送る。甲板部員の人々も陸であつた事又希望をかけた今度の航海の種々の話をしながら笑顔で船員室に入つて行く。それから漁場に行く迄は暇である。讀書に耽る者、編物を編む者、各自自由時間になる。依然海は荒れて居るが追風の爲体力の消耗も大して感じて来ない。時々大きく揺れて、いも洗いのいもの様に、ごろごろと揺れ時として寝台の角に頭をうちつける。約二晝夜寝たり起きたりの生活が續く。追風の爲時連八時半は出て居る様である。

やはり早曉だつた。甲板上で鰯の暴れる音の後に直ぐ響いた大聲に、あわてて飛び起きゴムカッパを着るのもどかしく、釣竿を引き下げてボースビートに飛んで行く。散水ははじき餌は面白い様に投げられる。そして初めの中は一本一本数えて釣上げて居たが、マスト上の見

頃だつた。二回釣とで約一万三千貫はあるだろう。今度の航海も既に終止符が付けられた。意氣揚々天にも登る心地歡呼の中に針路は歸途に向く様變針された。まるで桃太郎の御伽噺の様、鬼の首でも取り得難い物でも取つた氣持がした。食事する暇も惜しい様に釣る等と云う事而も一日で此の様な成績が上げられる等は本場に稀で。何年にも否何十年かに一回あれば良い方である。

此の様に多忙が續けば本場に嬉しく又働き甲斐がある。良人々は運が良かったのだと云つて之を片付けて了う事がある。だが唯單に運に任せて満事が終了するものでは無いと思う。特に漁業は相手は生物である。一時として靜止する事は無い。總て游泳回游の連續である。漁場の様子を良く知る事が如何に漁業に對しての影響を左右するかは申す迄もない。漁場の變轉適水等溫線等が漁業には密接な關係があるとは云え新しく云う迄も無く御周知の通りである。常に多年の経験と良識ある手段により事に當る事が肝要なのである。

何百哩の沖の彼方。組織立てられた船内で斯くも幾多の困難と多忙、怒り狂う怒濤と戦いそれを打破し續ける

等と陸上の人の知る處では無いだろう。吾々日常生活の食膳を嘩わして呉れる魚は、皆な海に生きる人々の苦悶の賜である。だが笑顔で食膳に向いおいしく食べて呉れる吾々を想い浮べる時、苦勞も忘却され唯に生甲斐を感じるばかりである。

海は無盡蔵の寶庫である。然し海をその儘放置して居るのは寶の持ち腐れになつて了う。特に日本は四面海に包まれた島國である。八千萬の人口の食糧を賄ひ耕地にして満足の出来るものではない。海は我々若人のくる日を待つてゐる。海に依存し海を開拓する即ち耕洋に努める事によつて若人の望は叶うのである。過去原始時代の丸木舟より發達した漁業史を繙く時祖先の多大の功績に敬服するの外なく吾々若人の任務がつくづくと課せられてくるのに氣がつく。幾多祖先の功績を助長すると共に、名實共に水産日本の誇りを持續し以つて意氣昂揚に移め若人に課せられた重且つ大なる責任遂行に努力されん事を切望して止みません。



詩

一ノ一
小野ヒサ子

えんぴつ

ふで入れを

そつとあけてみたら

何か話してゐるようだ。

私はそつとその話に耳をかたむけた。

私は一本のえんぴつです。

私の友はげしごむさん。

私のお家はピンク色。

ピンクの家でわたしらは、

たのしいたのしい生活を

毎日毎日おくります。

人のためになりながら。

私は時々こんなことを

えんぴつが私にはなしで

ゐるように思ひます。

星

二ノ四 米澤惠美子

冬の星はつめたく光つてゐる

だけど友達がたくさん

いるからいいだろう

星はなぜ返事をしないんだ

なぜ歌を歌はないんだ

冬の夜空は寒くはないか

星はばかり、ばかりとまたたいた

それが返事だ

それが星の歌なのだ

夜空をふつと北風が

ふつとふつた

四季

三ノ一 草野蓉子

小鳥が鳴いています

春です。

思ひ出の桃の木に

はじめて花が咲きました。

冬の公園

二ノ六 高橋介克

公園の庭には、かみくすが

くるくると、まわつてゐる。

たんだんとくらくら

汽車のきてきが、遠くから聞えてくる。

この世からみすてられたようなさつぷうけいな
冬の公園。

ヘチカ 三ノ一 加藤美津子

ライラツクの

黄色に包まれた、如に立ちながら

幼い私は父にきく

日本を想つていた、

石炭の

パチ／＼音のちる

大きなベチカの部屋で踵を輝かせて

幼い私は母にきく

日本を夢みていた。

でも今となつた私は

ベチカを見えない部屋で

思ひ出多き

幼ない日の足跡をさぐつてゐる。

足音 二ノ六 北川 郁子

そつと何かがしのびよってくる、

「足音だ」

何だか不安な足音だ、

暗やみの裏町を歩いている時のような、

半ばきようふにおそわられている時のような足音が、

私の背後におしせまつてくるようだ。

私に負けない。

どんな足音にも。

私はくじけない、

どんな寒さにも。

季節の變り日には必ず新しい足音が私を待ち私を追つ
てくる。

過去の足音は永久に歸らない、

夢と希望をだいて待つてゐるのは未来の足音だけだ。

だが未来の足音にも不安な影がかくれている、

だが私は負けない、

どんなつらさにあおうとも、

温泉のある茶屋で求めた

なつかしいコケシを見ると

石炭の音に踊つてゐる様

どつしりとした(壯大な)

ベチカが目の前をちらつく。

北京の赤練瓦の家

銀色に光るベチカ

それから世話をしてくれた

満人さんはどうしているかしら？。

水平線 二ノ一 馬上 公枝

海の彼方の水平線

苦しくもがいている様な

船の帆だけが見える所

どこぞにおちて行く様に

急に見えなくなる所

どんなめにあおうとも……。

くちびるに歌をもち、

心に太陽をもち、

夢と希望を胸にいだき、

私は通りぬける。

常に大志をいだき

勇氣とめいろうさをもつて

私は生きていきたい。

こんぼ 三ノ七 高橋恵美子

とんぼ

とんぼはきれいだ。

すみきつた青い空を

いつもすいすいとんでゐる

とんぼ

とんぼはきれいだ

黄金の稲の穂の上を

いつもすいすいとんでゐる

夕陽

二ノ一 橋本香枝子

海の上に夕映えが

美しく輝いていた。

私はその美しさに見とれて

砂浜に腰をおろした。

かにが足もとを

ちよろ／＼している。

つかまえようとする

あつちこつち逃げまわる。

夕日はむこうの山へ

しずんでしまつた。

冬の夜

三ノ一 齋藤忠正

つめたい夜だつた

足の凍るような

おもての木戸をあけたら

身ぶるいがしたよ ほんとだよ

だがもう雪は降つていなかった

冬の雲

一ノ二 小泉菊代

冬の雲にはなりたくない

微笑みかけても

話かけてもうるさげに

ただ黙々と浮んでる

コバルト・ブルーの青いそら

とぎれとぎれに重い足で

暗い顔して去つて行く

冬の雲にはなりたくない

雨

二ノ一 渡辺光子

いつ降るとなく

けさの小雨はなんと

なくさむい雨だろう

いつとなくしつとりと

濡れている

音もない

静かな雨

父の下駄だけがぬくかつたよ
さつきこの下駄をはいて
あるいていた父がなつかしく
後をむいたら父はいなかった

父を思つて

一ノ五 布施恵子

いつか来た道とうさんと

今夜のような星の下

ホタルがりしたおさない日

せんそうにいつたとうさんが

あわれなすがたでかえつてきたが……

もう一度ホタルかりをしたいおさない日。

私の目

二ノ一 松原敦子

目はどうして見えるのかしら

私たちは幸福だから神様が

見せてくれるんだよ

だから目を大切にするんだよ

夕暮

三ノ一 吉田ミチエ

妹の守りをしながら留守を守つて風呂の火を焚いた

沸きの早い五右衛門風呂はもう沸いたので

畑よりの歸りを待たないでと妹共に浸つた

すつかり浸りつくしたその時だ

あいにくの來客ではないか……

風呂の中からおとなうと

客は氣の毒げに また來るといつて

歸つて行つた

冬のくる日

二ノ三 平子サダ子

母といつしよに大根洗いをした

風もつめたく又水もこうりのようにつめたかつた

母がいつた

どこの家でも

こうして大根をあらつてゐるよ

冬のようににねえ

もう冬がきた。

寒い／＼長い間
さむさにまけないでくらさねばならん
母の手はまた荒れることでしょうね
冬はこない方がいい
母のために

秋の夜

二ノ四 遠藤 喜久

静かな晩だ
時々風が戸を打つて行く
みんないろりに集まつてお話をしている
私は一人はなれて復習をしていた
お姉さんが、私のそばに来て
針仕事をしている
いろりのそば、しんと静かだ
お母さんと、お兄さんはいろりのそばで
柿の皮をむいていた
だれもお話をしない
せどのくるみが一つぼたりと落ちた

冬

一ノ四 山本 豊美

冬だ
あの遠くに
見える山の
ちようじようは
雪をいだいている
この木はかわいそうに
冬の寒い
北風に吹かれて
つぎつぎにおちて行く
あともう三枚だ
こんなかれ木でも
落葉してまでも
強く生きている
私もこんな寒さに
負けないで
強く生きていこう

太陽の如く

二ノ六 清野 節子

太陽が笑うと、
世界中の草や木も、
皆一齊に笑うのだ。
人間も太陽の微笑の様に、
はればれとして朗らかになる。
私も笑いの中に育つてみたい。

寂しい心

三ノ五 上野 山 勝

なにか心に黒いかけ、
そうだ、きよう、
得意の学課テストが、
駄目だったんだ、
こんどこそこんどこそと、
心にちかつたんだが、
黒いものが心をゆすぶる、
落着くんた、
氣を大きくもつんだ。

素直な心

三ノ七 鈴木 眞砂子

素直な心を持つ人は、幸福だと思う。
誰もが、そうであるように
私は何よりも素直な心が好きだ。
すつと遠い過去の日
恩師がしんみりおつしやつたつけ。
『素直になれ。……』と
たつた、これだけの短い言葉だが、
どれほど實行しにくいことか。
私はいつも思う。どうすれば素直になれるかと。

光の影

三ノ五 仁木 万里子

教室も私達の机も
みな白くぼく見える
教室の中はなんとなくほこりつぽい
窓をあけると冷たい風といつしよに
光がさつと入りこんで
光は机に私の頭をうつした

黒い影とチヨークの白い紛
何となく印象的だ

白い月 二ノ四 宮本恵子

夕方、白い月が出ている
冷たい空気にさらされたのか、
寒そうに白く、白く登っていく。

日記帳 三ノ五 門馬智恵子

ダイアリーブック
楽しくも美しい思い出の数々
はかなくも落葉の如く
一瞬に消え去っていく
過去、現在もそして又未来も



三ノ三 野崎明子

寒空を耐ふて通學する吾に心つくせし叔母なる人は

二ノ一 柳内仁平

夕やみにくつきり浮ぶ燈台の灯は一すじに水の面にひいて
朝明けにガラス戸越しの海の面かすかなる沖に船浮かび
いる

二ノ一 熊田桂子

校庭に吹き荒ぶ風よこぎりに郵便配達夫今日も過ぎゆく

二ノ一 河原良子

夕迫り雨脚強く窓をうつ戸外を行き交う人のせわしき

二ノ一 柴田貞夫

放課後の学校はさびし廊下ゆく足音ばかり高くひびきて

二ノ六 本多忠男

今年こそ一日も欠かさず記さんと元旦の夜心に誓う
白雲の軽く流れる冬の空見つめておれば心うれしも

三ノ七 近内貴

川口に夏は水泳魚とり北風の今は誰も来ていぬ

短歌



三ノ三 菊地裕吉

夕立の晴れて明るき街の角大きくバスのゆれて廻りぬ

三ノ五 大滝正榮

再軍備すべしとの聲聞きおれば戦死せし叔父の御浮び来ぬ

三ノ二 得田和子

意外にも秋父宮の計を告げる今宵のラジオ音も静けく

三ノ一 海老根泰三

降り積る真白き雪を眺めつゝ心さびしく春を待つかな

三ノ二 大平孝

斑なる黒岩みえし赤井嶺峯美しく降れる初雪

三ノ三 柳内一

床を出で窓より眺む庭の面静もりており初雪降りて

今朝起きて見れば真白き家の屋根は雪の上にたなびく
夕暮れの淡き陽ざしを背にあびて家路をたどる心樂しき

二ノ一 馬目一行

木枯の吹き去りし後の裏山路枯葉つもりて裸木寒し
静かなる冬の小徑に夕日さしなにやら樂しべタル踏むわ
れ



俳句

句

花のせて朝草馬や露の中

三ノ二 渡邊節子

我があくび母に移りて夜なべ終う

三ノ二 渡邊節子

露雨に薄す紅や芒原

三ノ三 松澤輝雄

一日に何度もさわるつるし柿

三ノ三 松澤輝雄

レコードの止つた後の風の音

三ノ六 峰松卓司

鐘聞きて我れ忘れけり年の暮

三ノ三 菊地裕吉

風鈴を取り外したる秋の朝

三ノ五 大滝正榮

尻とりの文句つまりし秋の暮

二ノ六 日野孝雄

放課後の寒き廊下に薄日さす

二ノ六 田中智恵子

切春や梅もほころぶ我が胸に

二ノ六 田中智恵子

梅の花落ちて飛ぶはほととぎす
蒼海に光輝やく初日の出
木枯しや吹く夕闇に星さむし
干柿の障子にうつる冬日かな
花いけの梅一輪の散りている
炬燵をば圍みて春の句を結ぶ
人々と花見に行こう松ヶ丘
春雨にネオンの灯りけぶるなり
川端のアヤメの花を友ととり
稲かりの合間に背伸び汽車を見る
もみ穀も薄化粧する霜の朝
あちこちと枯草踏んで鬼ごっこ
降りに降り雪の明暮泣く子かな
柿の葉の舞ひ落つ朝や髪を梳く
旅人の足も急いで日が暮れる
子が泣けば一度に動く田植笠
夕ばえに赤く染まるや庭の柿
星かけを散らして一つ流れ星
そばかきの湯氣ゆらゆらと炉火に消え

三ノ一 小野 宏
一ノ四 村上 恵子
一ノ四 長瀬 毅
一ノ二 白土トキ子
三ノ二 笹原 政義
三ノ二 高萩 義文
一ノ二 渡辺 勝男
三ノ二 竹田しげ子
三ノ二 小林 照子

冬晴れの朝日は汽車の中にまで
さらさらと降る粉雪や年の暮
初日の出霜がとかされぬかる道
姿なき船の煙や冬の海
夜更けて桑に昔のある蚕かな
おき薬に露紅いやイチゴかな
スイセンのやさしくありて日記かく
書かぬ日もあるに違ひなき日記書く

三ノ二 小林 照子
三ノ二 秋葉 守
二ノ三 鈴木 貴夫
一ノ二 秋葉 禮子
三ノ二 上遠野 勉
二ノ六 長谷川幸子
三ノ一 湯澤 光子
一ノ四 渡辺 秋夫
一ノ四 上野 武夫
一ノ四 石崎美佐子
一ノ四 大竹 和子
一ノ二 新妻 房子
三ノ三 磯崎 玲子

雪の朝寝坊の子等も飛んで起き
焼芋のにおい残れる石かまど
サイレンのひときわ高し冬の空
湯の岳が峰白くして春を待つ
元日は心も清く書きぞめと
冬風は水たまりにも吹きにけり
雪の朝犬の足跡まがりけり
木蔭にて休めばほうし蟬の聲
夕涼み廣げて見えてる古新聞
初雪や犬の足跡そりの跡
雀の子親にはぐれてもらい宿
秋の暮子鳥さえずる山深し
雪の夜父かと思ふ靴の音
コスモスの花なき木々に月がさし
木枯や川にうつりし月もゆれ
新しき唇かいけり年の暮
吹く風に梅の花散る雪の上
別れゆく母校の窓にさす日
寒い晩爐端圍んで座談會

二ノ一 丹野 輝夫
三ノ三 小野 辰夫
三ノ二 小松サワ子
三ノ七 近内 貴
三ノ七 油谷サク子
一ノ二 廣岡 紀子
三ノ七 坂本 菊恵
三ノ七 松原 芳弘
三ノ七 石崎 君子
三ノ六 西田 信嗣
三ノ七 白土 秀雄
三ノ二 長瀬 稔
二ノ二 田田 征子
二ノ一 瀬谷 和子

道端のイナゴ取りする子猫かな
澄みきつた小池に浮ぶ木の葉かな
夕暮れに麦を見ながら使い道
梅の木に鶯とまつて花散らす
だいだいの香りゆかしき冬の味
正月や長閑に響く羽根の音
初雪や雀泣き泣き飼かさがす
遠き山近き山にも冬化粧
たんぼぼが一つ咲いてる屋根の上
若草の上を轉がる球白し
はや十日遊びすぎたる冬休み
お餅焼き火鉢を圍む一家族
正月に大空高く風上る
青空にひばり飛び立つ麦の中
雪の朝はく息白し手を口に
初雪やスキーで遊ぶ子供かな
白い雲梅の花さく春の風
冬の夕人も寒むそう年の暮
西風に麦踏む人の頬かぶり

二ノ一 瀬谷 和子
二ノ一 渡邊 裕子
三ノ一 松本 輝代
二ノ一 木下 清作
二ノ一 門脇 勝一
二ノ一 堀越 文夫
三ノ四 小野 久吉
二ノ五 吉井 利雄
二ノ五 清水 和子
二ノ五 本間まき子
二ノ五 藤社 良輔
三ノ三 安濃 三郎
二ノ二 鈴木 良一

西も蟬東も蟬や四瓜切る

三ノ三 小浜 四郎

秋涼し朝庭掃かれ土におう

農日誌最後の行に秋の句を

いつまでもキャベツ兩手に立話

野良歸り子供門にて待つてゐる

冬の朝道行く人の頬赤し

二ノ一 山野湯昌則

桐の木に一葉残りて秋深し

二ノ一 柳内 仁平

時雨來て急いで歸る農婦かな

一ノ五 布施 恵子

山路きて我に戯むる落紅葉

冬山の枯れ木に白く吹きかゝる

舞い踊る木の葉は冬の踊り子よ

一ノ四 花見 守

冬月夜子供は外でかけを踏み

二ノ六 齋藤 愛子

初雪の底を叩けば竹のつや

二ノ六 國井 歌子

馬の思ほのかに白し今朝の霜

除夜の鐘きくと思えば眠るかな

二ノ六 石川 薫

北風の夜に浮かぶ月の色

三ノ二 渡邊しげ子

鶏の鳴き聲遠し雪の朝

自動車のライトまぶしや雪の道

冬の夜鉄瓶のほかに音もなし

三ノ二 面川千枝子

寒行の聲遠さかる夜半の街

若松 正

凍てつける路ふみしめて音高し

職業と就職

高 津 九

我々の祖先が地上に人間としての集團生活を営むようになつた時代には職業が存在しなかつたものです。たゞ毎日自己の種族を他の動物から守りぬく生存権の擁護に専念していた事でしよう。それがすべての動物を征服して人類のみの繁榮を誇るようになると民族同志が競争と闘争に終始しました。此れは自己及自己の所屬する集團を保護するための必要から起きた結果であります。

此の頃には勿論職業などはなく狩獵と採取を終日否終生の仕事として従事しておりました。所謂これが彼等の「なりわい」又は「すざわ」と謂う行爲だつたのです。

其の後人類の進化と社會の進展につれ狩獵、採取のみにては集團の生計を維持することが困難となり、生産技術

の修得となつたのです。斯くて生産された物質が他の生産物と交換されて茲に經濟活動の開始となり、生業から職業へと轉化したのです。

即ち未開社會に於て各人各家族がそれ／＼單獨の自給自足活動を行つてゐる間はこれを生業と言ひ社會が高度に發展して各々の生業が専門的に分化され交換經濟の段階に入ると職業が存在することになります。故に職業を簡單に定義すれば人間が生計維持のため衣食住の資を入手する繼續的活動であります。これだけでは職業と言ひ得ないのです。即ち人間社會の分担的行爲の遂行が伴わなければなりません。我々が圓滿なる社會生活を営むことの出来るのは社會全体の恩恵であり、我々も意識的と無意識的とに拘らず社會の一分担活動を各々の才能と各自の立場又は境遇に應じて社会的役割を遂行してゐるのです。

この二つの目的が達せられて始めて立派な職業と謂うことが出来、此れを誠実に實行する人を立派な社會人と言ひ得るのです。故に優れた社會人が多ければ多い程其の社會は圓滿な發展と向上があるわけです。この役割を職

分と謂われています。即ち職業は生業と職分の二つの方面からなりたつています。即ち一定の社会的分擔の遂行により一定の報酬が與えられ、この報酬を得て各人の生計が維持せられてゐるのです。故に職業には自分の個性に應じ好むものを選び充分に社會的分担を遂行して然る後、これに對する報酬を得て自己の生計を豊かにすると謂う大なる目的が含まれてゐるのです。

近代社會にては職業の種類も多く此れを選ぶことも自由です。其の結果として正しい配分の原則が叫ばれる所以が故にあるのです。

職業は如何なるものを選ぶも各人の自由であり選んだ職業を通じて遂行する社会的分擔は公平に一であります。社會組織の上位にあるものも下位にあるものも一であります。よつて職業の貴賤がない理由がうなずかれるのです。

我々は社會の商車であり自轉車の商車は時に上位に在り時には下位に在ることがあるでしょうが、商車自体の役割と使命には聊かもかわりがないのです。故に職業の選擇には此の理を充分考慮せられる事が肝要

です。最近深刻なる就職難が現出して居ります。或る資料によると我が國に於ける就職適令者は毎年百萬人と推定されて居ります。その内大学卒業者のみにても十二萬人餘と言われて居りますが、いかん乍ら獨立後日淺い日本にては此等の人を收容し得るだけの産業施設が未だ復興して居りません爲に就職に奔走し競争に勝たんと努力するので。この現象は國家的にも又個人的にも悲しい事實と言わなければなりません。

此の就職難は前記收容力の不足にあるのですが、然し最も根本的なものは職業を好みむこと即ち職業に貴賤ありと區別して商車の上位の方に希望者が集中するからと考へられます。前にも述べた如く社會的分層はどんな人でも一であり、盡す職分には聊かも上下貴賤の區制がないことを自覺すればこの問題は幾分でも解決し得ることと思われま。

立派な職業人とは服裝と地位によるものでなく完全に誠實に社會的分層を遂行して自己の家庭生活を豊かにする人々を言うのであります。勉學とか研修は職業を得るための手段でなく自己の職業を通じて社會の向上と人類幸

福への協力を可能にすることにあると考へられます。

故に世のすべての人々が職業の貴賤を區別せず、大學出のお百姓さん、建築技術家の大工さん、課長さんと同窓の職工さん、船長と同資格を有する水夫さん等がどの社會にも満ち／＼ていたら世の中はより一層円滑に明期に運営されることでしょう。

官廳の窓口へ行つて「ヤア」先輩と言へる出願者、先輩宅にて諸をかじりながら野菜作りの苦心談を談じ合う農林課長の後輩等考へただけでもほほえましいではありませんか。

こうなれば官尊の思想もなくなり、非常に良い政治も行なわれ、文化國家の樹立も難事ではないと思われま。諸君職業を選び、就職を希望する時には見栄を捨て自己の個性に合致せるものを選び、職分を通じて自己の才能を伸展せしめることが社會全体の發展に盡し得ることを考へて、如何に進む可きか、何を選択すべきかを慎重に決定することが肝要であると思ひます。如何なる職業に就くも勇氣と努力誠實とがあれば後年必ず職場の長となり師表と仰がれる事信じて疑わざるところです。

即興

無方

上野駅（二月二日）

疲れている顔 樂しそうな顔

保安隊 サラリーマン 日本髪

東京駅精養軒

にぎりめしに COLD BEEF

駐留軍と 和服のサービスガール

帰郷（車中吟）

美しき山よ海よと振り返り

振り返りたり磐城のあたり

汽車中にリンゴむきつゝ夕光る

寒き川面をしばし見つめぬ（利根川）

小名浜

この町の風景 サンマの中に人がいる

有耶無耶

我々は無意識において如何なる意識を意識するか。人間とはこの種の問を自らに課して悩む存在である。佛ありや、神ありやの問もこれに類している。無いと困るからある筈だと云う、あゝわからなくする。



卒業を祝いて

杉下 山佐子

羽搏きて行く空廣く隘阻なり

心して飛べ若鳥なれば

めぐり來ることなき君の青春に

悔あらしめず行きませ

おの／＼の目指す彼岸の花園に

桂折るべし君、君のため

千歳に名を垂る如き事成して

生き甲斐あらしめよ君、君のため

人生は五十年なり無驗もなく

急ぐことなく心して行け

小名浜の野に春立ちて雲雀揚り

心うれしき今朝の空かも

小名浜の港の空に大船の

汽笛響けり出船なるらし

三ノ三 石井 公子

課外終えて友と家路をたどる夕身も冷え冷え
と仰ぐ山なみ
落葉して裸となりし柿の木に赤き実一つ夕日
に映えて

二ノ三 小沼 十四子

平凡に過ぎしが如く見ゆれども想いは多きこ
の一年ぞ
米とぎてその白水を流しいる母の姿は尊くも
あるか
風呂敷に包みおかれし端きれの中より選びて
靴下つくろう

夢想

明 寛

吾がために讃美歌うたえる若き人
おぐらき室に宴會いでて
吾が信ず思想をくだく男あり

こにくき奴なれど嬉しき

吾が抱く思想はすべて空想か
眠れぬ夜半に夢を夢みる

小 松 嘉 一

静にもじつと涙の出づるまで

唯一人との文字を見つめる

庭隅に鳴きしコホロギの音も絶えて

淋しきまゝに秋深み行く

うら寒き校舎の窓にもたれつゝ

幼き頃の夢路辿りぬ

詩

野 茨

草 苑

野は五月。

旅心をいづるにも。

陽にうつゝ、

そよぎにうつゝ、

香ぐわしきにより添えば

野茨のさゝやける

〃神こゝに満つ〃

遙かなる希望

Y ・ M

さえ切つた冬空に

星はまばらに深く沈んでいる

裸になつた枯木立は

痩せ細つた体を背伸びして

遠い大空の星を慕つて

もろ手をかざして指先をふるわしている。

茶わんのかげらのような細い月が

その指先に近づいたが

いつか地平の彼方に落ちてしまつた

凍てついた木枯は

鋭い罵聲を浴びせながら

無情にも木々の痩せこけた手を

強く吹き拂つている。

流星が

細い尾を引いて糸のように消えて行つた。

夜のスケッチ

柚木英之助

あらゆるものがその抵抗を止めて

その腐敗し切つた鬱陶氣の壓力に

倦怠と停滯と沈澱とを

ほしいままにしている

往々千年の日よりの

黄蛾のその抵抗のみが

限りなき時間の経過に

限りある時間の跡を

きざみつけてゆく!!



汗顔高言

酒井 國應

新春

紫から紅に、そして金色に輝く空、1953年の舞台は雄大に幕を明けた。多難な國の前途だが人々は皆挙つて平和と幸福を祈る氣持で一ばいだ。タコウなり、追羽根の音にも悠久に連る日本の春を感じるのである。しかし無理して日本髪をゆう必要はない。

帰郷

二日二十時三十分東京驛を發した銀河は一走り今は靜かにつかれた巨体を初雪敷く京都に横たえている。私は土産をさげて降りた。チョンマゲ頭にタキシード。そんなように見る京都驛「古さ」を賣物「國際文化觀光都市」最も新しい化粧を凝らしている。古いイラカもいかめしい東本願寺から望む白亜の新駅は觀光都市のもつ皮

肉な運命のシンボルでもあらうか。

漢文指導

(1) 日本文化の源流把握のため——終戦後の國語學習の風潮は民主主義社會における言語の基礎的技術の養成助長にありとして經驗學習のみに力をそそぎ敗戦の責は古典教育に負わせるかのように殊に古典に對しては無視されていると言つても良い状態であつたが眞の古典は永遠の生命を持つ貴い價值の中に深く持ち普遍妥當性ある規範の中に藏しているのである。随つて經驗學習も亦大切であるがしかしここにあらゆる文化の部面で生徒の經驗を豊富にしてその機能をかためていくためにも傳統文化の中に存する古典を理解することが是非必要である。しかも日本文化が東洋中國の文化の影響を漢文文化の道の精神を攝取同化している事を思ふべきであらうである。

(2) 隣邦中國を認識するために——第三学年の國語科の學習單元が殆んど生活を中心にした學習であるため生徒の文學に對する學習意欲が高まつており、世界文學の一環として且つ現世界情勢下隣邦中國の再認識から言つてもさらに良識と教養とを高めて新しい日本文化を築く根

底を作るためにも日本文學の美を培つた中學生に更に廣く東洋文學の美の鑑賞探求の對象として將來國際社會に活動する人間を形成するためにも漢文の學習は極めて重大な課題と考へる。

再軍備論

歸郷の車中でよつばらいが大聲で再軍備反對を叫んでいたが再軍備の問題はそんな酒のみが語るべき生やさしいものではない。深刻な生きるか死ぬかの問題だ。右も左も世界は大きく再軍備に狂奔している現狀に、事實は私達の想像以上に先まわりしている事を知らなければならぬ。銀座がクリスマス夜の騒ぎをやつていゝ時飛行機で五時間の隣り京城の夜の不氣味さをしのばなくてはならない。東洋のスイスだと誰かが言つていたが東洋のバルカンにしたいくない氣持は私だけか。私の教え子は保安隊に入れたくないが……。

老子の言を思いだす「兵者不祥之器、非君子之器。不得已而用之以活済爲上。」

表裏

近代的と言ふのは『表面のみの美觀』が近代的と言ふ

のかと思ふ程の世の中、化粧品、廣告、藥の廣告をみて、映画の看板をみてもみな最優良品であり萬病一つとしてなおさるなく、本年度最大の傑作であり書店に行けば帶しめた美しく見える本が中味はカラッポ以上でありながら「買いなさい」と附録をだいて横たわつてゐる。嫌な事はかりだ。裏を出して

一 中

入れ替り立ち替りここ二三年來一中はよく先生方が變つた。そのうちに私もその入れ替り立ち替りの存在になる。だが一中程私にとつて良い經驗の場はなかつた。私は、中を愛している。少しぐらいの教養が知識が。それで「われ文化人なり」なんてうぬづけてはならない。宇宙廣大無邊眞理不測今の境遇にあまんじてぼんやりしてゐては井中蛙になる。いつか「よき父母よき師よき友よき妻よき子を持つ」これ人生の最上の幸福なんて投書したり「弧高」なんてかいていたが私はよき師を持つた。鈴木孝雄校長を初め山口先生全てが忘れられない想ひ出の數々である。時に境遇にあまんじ時に眼を天涯に向ける。

世間

世間は目あき三人目くら千人と言うがさて自分は。

涙

病床の妻の呼吸だけ聞こえる室に突然きくに耐えられない野卑な大声の言葉を窓外に聞いたが……。どういった人種なのか？

(睦月十一日松田病院十一号室にて記す)

創作 猫事件



二ノ一

木下清作

私の父はある町に烏屋を営んでいる。六人家族で平和な家庭である。父は動物が好きで教養もあるが欠点もある。頑固親父だ。一度云いだしたら後にさがらない。母はやさしい母で父を何時もなだめている。兄が二人いるが一人の兄の正夫は東京に出て働いている。もう一人の兄の重夫は高等学校に通学している。二人とも良い兄

すまぬと思つたのか、ところが母も妹も賛成である。「ねずみが出て困るから」と母は云う。妹は三三二で勝と見たのか「どう兄さん」といばつてゐる。「なにこのおちよつかいめ」と僕は妹をつねつた。今までもまい御飯だつたのが一變にますくなつた様だ」。さあさ御飯がますくなるじやないか早く片づけますから食べてちょうだい」と母が云う。この話はこのままになつたが暗い氣持だけが心の底に残つてゐる。寢床に入つてから僕が見さんに声をかけた。「兄さん起きてゐる」「うーん」と變な聲で兄がこつちをむいた。「あのね妹はいばつてばかりゐるけどどうだい東京の兄さんに手紙を書いてもらつて反對してもらうんだよね」「うんそりやいい考えだ、よしさつそく僕が見さんの所に手紙を出そう」「そうしてねちやおやすみ」

二

それから五日たつて僕が學校から歸つてくると兄はもう歸つてゐた。「兄さん早いなだね」と聲かけた。すると兄さんは「ちよつと」と呼んでゐる。なんだろうと思つて行つて見ると「おい、兄さんから手紙が来たよ

だ。妹が一人小学校五年であり何時も僕と喧嘩してゐる。僕は中學二年で皆動物が好きだが僕は違ふ。大きらいだ。中でも猫が大々きらいである。猫のねもきらいである。ある晩大變な事が起つた。皆樂しく御飯を食べて話のはずんでゐる。兄さんが「僕ね我が家は猫である夏目漱石の本を讀んだけど、とても面白かつた。朝夫(僕の名)お前も讀まないか」と云つて兄が本をさし出した。「いやだ」と僕は答えた。「いやだ!どうして」一杯氣げんの父が云つた。「だつて兄さんは僕の猫ぎらいを一番知つてるでしよう」「あゝそうだつた。すまなかつたね」と兄さんはあやまつた。「兄さんいいさ」と僕は氣げんをなおした。このような調子で良い兄なのである。ところが父が眞面目に云つたのか、からかつて云つたのか「時に朝夫、重夫、雪子、それからお母さん、どうだい猫を飼おうじやないか」「お父さん、朝夫をからかつてるでしよう、からかつてゐるのならやめてください」と兄がいつた。「いいや眞面目に話してゐるんだよ」「いやだなあーお父さん今云つたばつかりなのになにに絶對反對」「僕も反對」と兄も答えた。さつきの本の事で僕に

封を切つて見ようか、心配だね」「なんだい心配だねと云うのははゝゝゝあの晩から笑つたのが始めてである。ずつと前は一日に何回笑つたかわからなかつたのに。兄さん(おい、元氣かねあの手紙を見ると元氣すぎるようだね。お前達は反對らしいが僕はどつちにしようかね。賛成ならお前達がつかりするだろうね、といつて反對と云うとお父さんがおこるね、それで一晩考えてみた、そして考えをこゝろまとめたよ。お父さんが動物好きで反對を押し切つて猫を飼う家庭が亂れるなら僕は反對する、しかしだね、朝夫が猫ぎらいで猫を飼うのに反對し猫を飼わないと父がおこり家庭が亂れる。だから僕はどつちとは云えないよ。だからこの手紙を讀んで判斷してくれ、お父さんお母さんによろしく、さよなら)「ちえ、たよりない兄さんだねまつたく」と僕が云つたら「たより、たよりならそこにあるよ」と兄さんは云う。この頃兄さんは冗談を云うようになつた。「本当にどうしよう」「今晚休戦會談だ」「うん朝鮮動亂だね」と僕もつられて冗談を云つてしまつた。

三

その晩御飯をだまつて皆食べている。こんなさみしい事はない。兄さんが思い切つて父に話しかけた。「お父さん伸直りしよう猫の事はこのままにしておいて」「そう伸直りなさい」と母が云つた。それで伸直りときまつたので兄の手紙を讀んだ。「やつぱり兄さんはえらいね」と母が又云つた。妹は「休戦ね」と意地わるそうなものたりなさそうな、おこつたような變な顔をしていた。ところがこの問題が終つたと思つてほつとしていたら、妹が猫を拾つて來た、と云つて持つてきたのである。後になつて氣がついたがこれは妹の計画であつた。そして又猫をうどうである。父も母も「拾つてきたなら飼わなければならぬ」と云つて飼うことになつてしまつた。兄さんまで賛成してしまつた。もともと兄は動物が好きなのだから、僕も人間という動物なんだから、好きになれないかなあと考えることもあつた。妹と僕は喧嘩してしまつた。妹と口をきかなかつた。猫は皆に可わいがられ成長していつたが、僕を見ると逃げるようになった。猫を見ると憎うしくなつてけつとばすのがくせになつた。逃げるところを見るとよい憎らしくなる。これに

は母さんもあきれている。お母さんに猫の事で説教され猫を好きになろう、好きになろうとしたある時、このような事をした時であつた。「お母さん僕猫をかわいがると云つたら妹が「兄さんにできるかしら」と云つたのでかつとなつてしまつた。ちようどそこに猫が入つてきて妹のひざの上のろうとした時なのでかつとしたついでにけつとばしてしまつた。このような事が何回もあつた。

四

ある日父に説教されていた、ひどく父はきげんが悪かつた。その所に妹が「大變よ大變よ」と叫びながら入つてきた「なんなのそのさわざは」と母も見も集つた。父が「なんだちやんと落ち着いて云いなさい」と静めた。「あのね猫がよだれを流して苦しんでいるの」「えゝネコが」父は立上あがつた。この頃の父はネコの白をかわいがりにかわいがつていた。まるで家庭の一員みたいに同じやりかたである。皆なで行つて見た。父は「これは骨かなにかしたんだよ、朝夫ネコを獸醫につれて行け」「えゝ僕が」「えゝ朝夫が」と皆おどろいた。「そ

れは良くない僕が行つてくるよ」と兄が云つた。「私が行つてくるわ」と妹も云つた。「いや朝夫が行つてこい」と父「それは」と母、「いかん、朝夫行つてきなさい」と父は云い切つた。ぼくが行く事になりいやゝゝながら自分の部屋にふろしきを取りに行つたところが、部屋がちらかつてゐる。僕のだいいじなグロブがかみさかれ、兄さんのだいいじな鳥がかみころされてゐる。猫があげられたのだらう、階下に行きこの事を父につげだが「朝夫早く行つて來なさい」である。獸醫の家は遠かつた。田んぼ道を通らなければならなかつた。僕は猫をふろしきにつつま家を出た。そして、田んぼ道を歩きながら、今までの事を思ひだした。だんゝ猫が憎くなつてきた。そして猫を捨てようと思つた。そして夢中でなにかしたのである。我にかえつたら、家の門にきていた、そして猫を捨てた事を知つた。顔は青ざめふるえてゐるようだ。家に入つて父が「どうだつた」と聞いた。ぼくは答えなかつた。僕はしばらくして思い切つて「捨ててきた」と云つてその場にすわりこんでしまつた。涙が流れた。なんの涙だかわからない。父、母、兄、妹のおどろきの顔、

何にも云えないようであつた。それから數分後、父が「さがしに行こう、朝夫どこらに捨ててきた、案内しなさい。」僕は答えられなかつた。「夢中だつたからわからない、田んぼ道に捨てたのはたしかです」なきながら云つた。「まあとにかく行つて見よう」と父は立つた。「皆きなさい」田んぼ道にきてから父は「手わけをしてさがそう」と云い一人一人別れた。私は寒い田んぼ道をちようちんを持つてこうかいしながら、かわいそうな猫をさがして歩た。そして自分があわれになつてくる。「なぜ僕は猫がきらいなのだらう、さぞうらんでゐるだらう」シロの顔が浮ぶうらめしいような顔だ。だがついに見つからなかつた。皆家に來、父は明日さがそうと云つた。「お父さん、お母さんすみません」といつたが後はなにも云えなかつた。寝むらうとしても寝むれない、シロの顔が浮ぶ、どうか生きていますように」と云わずにいられない。だが神は見事うらぎつた。寝むられないまゝに朝がきた。まだ皆寝てゐる、僕はそつと起きて昨日の田んぼ道にきた、そしてさがしてゐると、田の中に入つて死んでゐた。さわるとまだ暖かいようだ、僕はななとも云

えない氣持で猫をだき家に歸つた。母たちが出てきた、母を見るときゆうにかなしくなり涙が流れた。シロの死体を出した。皆朝御飯である「お父さん、お母さんすみませんでした。僕はどうしていいかわからず猫をだきながら考えました。そして猫は梅の木の下にうめます。それからネコが好きになるよう努力します、ぼくの小さいでぼうさんと呼んでお経をあげてもらいます、僕がこういうとお父さんは「ぼうさんまで呼ばなくなつていいよあつはゝゝゝ」僕はなき笑いをした。「お父さん私もうそをついていたの、兄さんがあの時から憎くてしようがなかつたので、友だちから猫をもらつてきて拾つたと云つて家にもつてきたの、ごめんさい、兄さん仲直りしようね」と妹が云つたので僕は握手した。これで萬事動乱もついにあつた。お母さんは「それでいいんだよ、いいんだよ」と泣き笑いしている。「そうだお父さんも悪くかつた御飯を食べてからおそう式をしようね」こうして又平和な家庭がおとすれた。僕の作つた箱にシロを入れ、妹が花を一杯入れた。そして（シロよありがとう）と書いた紙をいれた。梅の木の下にうめた。兄はハーマ

た家に主人と住んでいるのである。私の主人は何をしているのか一向見当がつかない。馬鹿に朝早い時があるかと思えば自分の顔の上に太陽がさしても知らずに眠つていられる事もある。私の知つた範圍では一文なしである。金ぶちの眼鏡をかけて口ひげこそいかめしく延ばしているがその生活状態と云つたら實際めじめなものである。又此の頃は、どの衣類にも穴が出来て一そうみじめな格好をしている。どういふ積りかそれでも感心にすましている。時々帽子を一日頭にのせて散歩に行くその時だけは何處かの若様のように見える。それでも家に歸ると何か讀むか、書くかをする。

彼は近頃銀行に入つたばかりで蚊やさえ求められないものと見える。これは私にとつて都合な事である。それで彼が毎晩寝る時にはたいい手拭で拭いたてゐるが障子の骨の影などの狭い間に這込んでいれば大丈夫だから私などは少しもきずかない。又此間などは面白かつた。私の友達と一諸に大勢で驚かした所新聞紙を二、三枚程いぶした。その結果は私達よりも御主人の方が苦しくなり、障子をあげ放しのまま飛出してしまつた。一時間

ニカではたるの光をふいている。そしてこうかいた石帯を立てた。

このさゝやかな梅の木の下に
平和な家庭の一員として
シロはねむる

ありがとう

この事を東京の兄に知らせた。兄の返事は「よかつたなあ」と云う言葉一行であつた。

—終—



私は蚊である

三ノ二

柴田節子

私は蚊といふ動物だ。人間の話によると何でも蠅とか云う動物の様に昆虫の中でも双翅類に属するいやなもの一つだと云う。私は遂に日前迄はサナギだつた。脱皮した時は全く嬉しかつた、何んでも、私はボウフラの時代は淡暗い水の中が舞台であり今に比べると狭くてお話しにもならない所だつた。現在は昔の用水池とは全く違つ

位過てから御機嫌ななめな顔をしながら又手拭で追立てたりしてどうしても眠られず、とうとう夜あかし迄した事があつた。何でもよく横文字の本を讀む。新聞を切り抜くこともある。

私の主人は勉強家であることは事実でこれこそ私の仲間迄に誇り得る点である。それでもこの頃では私達の攻けきが猛烈な爲、夜も眠れず神経衰弱にかかつたらしい。時々馬鹿／＼しい程大声をはり上げて近所の人を驚かしている。全くゆかいである。

きく所によると神経衰弱回復の爲、蚊張を近日中に買うらしい。しかし何と云つてもあの大きな牛のような体をビクリとさせるのが一番ゆかいである。



明るい生活

三年二組

吉田

弘

ここはある小さな町の中学校の三年生の教室の中、きつと休み時間なのだろう。

もう冬が近づいたのかはなんてんに手袋姿の女の子がはしやきながらナワ飛びをしいる、男の子達は校庭せましとばかり夢中になつて野球をしている。その時教室でたゞ一人この騒然たる様子をぼんやりながめている少年があつた、それは高野弘少年である何を考へてゐるのかじつと地面を見下ろしたり校庭の様子を見たりして考へこんでいる。

その時先生はこの高野君の様子を見ていた、しばらくして。

「高野さん一寸と来てごらん。」

「はい」と云つて先生の前に行つた。

「先生何にか僕に用があるんですか。」

「高野さん先生ね、さつきから見ていたんだけど休の具合が悪るいんじゃないの、ええ」と高野君の顔をのぞきこんでいる。先生の顔は心配そうである。

「僕はなんでもないんです、どうしてですか先生」と今度は反對に先生に聞いている。

「それはね、高野さんの様子が前よりも變んなのよ、たとへば今だつてぼんやり外を見ていたり地面を見下ろし

な笑い聲等が聞えて来る、そんな時博はどんな思ひだつたでしょう。

「ああ、なぜ僕の家はあの單調な笑聲一つ立てることが出来ないのかなあ」とかえつて朗らかな笑い聲によつて博の心は反對には曇つてしまつた。

そして家に歸つてみる家の中は眞つ暗、外より冷めたい感じがするくらいである。まず電燈のスイッチを入れて腰かけて机に向つて何に考へてゐるのか、ぼんやりしてぼんやり目の前の姉の寫眞を見る、そういうしてゐるうちに「ポーン」とたつた一点淋しく時計が五時半の知らせをする。

「あどつこいしよ」とさも重そうに立ち上り台所へ来る、台所と云つても玄關兼用である、板の上に腰を下ろすとひやりと冷めたい、やがて「バタ／＼」とうちわの音、炭のはじく音、ナベのぶつつかり合ふ音、ほうずを使う音、湯のたぎる音等入りまざつて聞えて来る、その音がやみ湯のたぎる音だけが聞こえるところになるともう大休夕飯の用意も終つた頃である。

博はイロリに火を移している、こたつにするらしい、

たり皆んなが楽しく遊んでいる時でもそんないとしてゐるので先生とても心配していたのよ、博さんなんでもないなら先生も安心したわ、それでは元氣を出して勉強して下さいよ、ね」と先生は優しくはげますのであつた。

やがて授業も終つて放課となつた。

「さようならあ」といつものかどで皆んなと別れると自分の方へ一諸に歸る人もない、尙一層淋しくなる……。

「ああこれから家に歸つたら……」と一人小さくつぶやくのであつた、なぜこんなことをつぶやくのか。それには少しわけがあつた、父は漁の漁夫の生活にすつかり身につき性質も荒らく、言葉使いも荒く時々父と母は話合ふす面白くない時もあつたし、少し事情もあつて急に家計も苦しくなつたので母が近所のミリン干製造の加工場で働いている。歸りはいつも暗くなつてからなので博は今まであまりやつたことのない御飯の用意もやらなければならぬので思ひす不服をもらすことさもあるのです、そんな事を考へながら歩んでいるうちに本通りに出た。もうスズラン燈は明々とアスファルトの道路を冷めたく照らし出している、時にはよその家から朗らか

博自身はこたつは必要がない、なぜだろうか、それは博の母思いの心から来るのである、普段は母に云われるとすぐ口返しをしたり反對する博であるが心に思つてはとをこの様な所に表わしているのである。性質としては心に思つてゐることを口で表現出来ない型なのである。

やがてこたつも出来た博は机に向つて本を読み始め、讀んでいるうちに台所で「ガタツ」と音がする、博はびつくりして台所を見る、内心は「びく／＼」しているらしい、しばらく讀んでいるうちに本にあきたのか大きな背伸びを二つ三つしているところへ、「バタ／＼」と長ぐつ音がする、母が歸つて来たらしい。

「たゞ今」と母は寒そうに手をこすりながら入つて来る。

「お歸りなさい、お母さん寒むかつたでしょう」。

「とつても寒むかつたよ手の先の感じが無くなるくらい今日は普通より寒むかつたよ、どれそれでは博ちゃんを作つた夕ごはんでも食べようかな」と云うような話しをしながら、さゝやかながら夕食が始まる、やがて夕食も終つて二人はこたつに入つて今日一日の学校であつた話

や仕事場での話をお互に話し合う博も三年生で半分大人で半分子供らしい話をする。

博も委員長をやつたこともあるのでいつもクラスのまとめ方については頭を痛めている、そんな事を母と二人で話し合っているうちに九時を知らせる時計の音を聞いて、初じめて二人は話から氣をそらすのである、それまで二人は今日一日の話に夢中になつていたのである、やがて母は時計を見上げて、

「もう九時半よ、博ちゃんも早くねないと明日の朝早く起きられないよ」等と云いながら母は床を敷き初めた。

「お母さんも早くねなさいよ……」と云う博の心の中には……「お母さん苦労かけてすみません一日も早く大きくなつて役に立つようになりませう」……と云う氣持があるのだが、それが口に出せないのである、博はこう云う時いつも考える、「僕はなぜ心に思つていることが全部口で云い表わすことが出来ないのか」と云うことも博のなやみの種である。

母にもよく云われることだが、お客が来た時心では面

白くないと思つても口だけでも良くしてあげなさい、と云われる。

やがて床も敷かれて母も床に入つた、博はねる前に豫習の意味で教科書を少し読み理科のノートを一通り目を通した、母はもうねてしまつた、博はいつもこの静かな時に自分の悲しい事を思い出してしまふのである。

一番悲しいことは兄弟が居ないことである。博にとつてはおさえられない悲しみである。しかし今から四年前のことをいつもなつかしく思い出される、それは博の五年生の時に小さな村の学校に轉校した時からのことである。組主任の先生は女の先生でもとても優しくつた、今考えてみても博が委員長になる様に能力をつけてくれた先生がその先生である。轉校前までは性質は荒く学校をさぼつたりした博である、それなのに不思議にも先生は自分のことを認めてくれた、それまでは毎日の様に放課後皆んなの歸つた後先生にしかられたり、注意されたり、時には、はげまされたりして現在のようになつたのである、その頃もやはり今の様に兄弟をほしがつていた、ある放課後先生に注意を受けている時など兄さんや姉さ

んの居る人のことをうらやましがつたことを自分が云つた。その時先生は「それでは先生は博さんの姉さんと先生の兩方になつてやるからなんでも思つていることは先生に打ち明けて相談しに來なさいね、先生なんでも相談に乗つてやるからね、それから苦しみは何も分け合ひのよ、楽しいこともね」と云われた時の自分の氣持は今でもあり／＼と思ひ出すことが出来る、それからというものは何んでも先生と相談した、やがて自分達も六年生になつた、先生も五年生を修了する時、先生は持ち上りではなく六年になれば先生が變ることがわかつた。

その時クラスの人達は先生に……先生なぜ僕達を又持つてくれないのですか……と先生の前に行つて先生にぶら下つておしんでいた男の生徒もいた、男の子もしかられたりしたがやはりなつていて先生と別れるのをおしんでいた、けれどもしかたがなかつた、修了式も終つて教室に入つて來ると皆んな悲しんでいるのか笑い聲一つ立てる人もいなくなつた、やがて先生は別れのあいさつをした：「別れるといつても学校は同じなのだからいつでも遊びにいらつしやい……といつてゐる。

六年生になると小学校では最上級生である、組主任は男の先生であつた、その時のことを今思ひ出すといやになつてしまふ、五年生の終り頃に入学して來た生徒がいた菊地少年である学力は博より上であつた。

ある日の五校時に博達は家庭の時間で女の子は五年生の時の先生に習つていた、男の子は校舎のはじめのゴミ掃除をしていた、博は皆よりはじめの方で石をはがしいいた、すると向うで博の後で石運びをしている菊地君を呼んだ、なんだろうと思つてみてみると一人が菊地君に博の方を見ながら耳うちしている。そのまま作業を續けてみると、首すじのところに冷めたいものを感じた手をやつて見ると土が入つている誰だろうと思つてみるとそんな様子もなく皆んな作業を續けている。そんな事が五六回續いた博もそろ／＼腹が立つて來た、菊地君がやつてゐるのである、そのあとにやつて來たところをつかまえてなぜやるのか聞いてみたがにや／＼笑つていて話さない、それはなぜだか博にもわかつてゐる、博が五年の三學期に委員長をやつた、又六年の一學期にやつていて、自分が出來ないのでうらでいじわるをしているのである。

「菊地君何んにも作業をやっているのに、じやますることないじやないか、いたずらするひまがあつたら石でも澤山運べよ君よ」とそこまで云つたもののくやしくていなくなつた。

菊地はするそうにいつた。

「僕はなにもしないよ。君のはがした石を運びに來たのにとつぜん僕をつかまえて、そんなこと言つたつてわからないよ、証據をみてからいつたらいゝじやないか」と大きなことをいつた、証據とまでいわれては仕様がな、博ははすかしいやらくやしいやらでこんなところにはいたくないと思つた、授業中も忘れて教室へ歸り教室で授業をしていた先生に「歸ります」と一言いつて学校を無断で飛び出した時であつた。

こんなことを思い出していると「ボン」と時計が半の知らせをした、十時半でもうねる時間である、戸締りをきちんとしてシャツツをぬいで床に入つた、すると又今年の夏のころのことが思い出されて來る、ある放課後六七人の友達と運動會の練習をしていると、とても暑くなつたので二人で外から教室の中へシャツツを投げ込んで

「そうですね、私もうちの子供に大人のくせにわからないの、などと笑われる時もあるのですよ」

父母もだいぶ年を取つたらしい、それに反して自分のかたに重荷がかかつて來たように思われる、こんなように「うれしいうるかなしいうるな」と云う言葉通りの氣持になつて床に入つてねてしまふ。

朝夢の中に母の聲が聞えてくる「博ちゃん博ちゃん」又五分位たつて「博ちゃん博ちゃん」と呼ぶ、目をさましてみるともう六時半母はもう台所で朝の仕事をやつている、博は寒むくて床から出ることが出來ない、又うつら／＼してしまふ、母は「博ちゃんもう七時よ早く起きないと学校におくれるよ」と云われて初めて博は床からはい出して行く、朝ごはんを食へ終ると前の友達から聲がかかる、博はいつもおそいが皆んな待つていてくれる全部集まると映畫の話やら學校の話をしなが歩き出す、學校へ來てみるともう皆んな來ている又映畫の話でもちきりである、皆んなを熱狂させる程映畫の技術が進歩した証據である、やがて始業時間になり授業も始まる、この授業時間が一番好きである、問題はとけなくと

行つた、そのまゝ先生の指導によつて練習していた、終つてから教室に歸つて二人で投げ込んだところへ行つてみるとシャツツがない、困つたとまわりをみてみると自分の机の上にきちんと二枚のシャツツがたんで置いてある「いたずらに男の子がやつたとしても、ていねいしすぎる誰がやつてくれたのだろう」と思つて後に集つていた女の子達に聞いてみた。

「K子さん僕のシャツツ誰かたんでくれたかわからないの」

「Y子さんがやつたのよ」とおしえてくれた。

「Y子さんどうもありがとう」とその時は一言いつただけだが感謝の氣持でいつぱいたつた、博も優しい氣持だけは忘れることが出來なかつた。

理科のノートをもう一度目を通した、中にはなかなかむずかしいところもあつた、味が時々お客様と話し合つていゝことが思い出される。

「このごろの學校のことで質問されることがさつぱりわからなくなつて來ましたね、これも年を取つたせいですね」

も他の事一さい忘れて考えるからである。

博は「日常生活を行なつて以上うれしき事、悲しい事等色々ある、どうせ生活するには楽しく暮らした方が得である、そのためには悲しみをあまり作らないことである、と云つても世の中は廣い、悲しいことでも、うれしき事でも泉の様に湧き出てくる、そのためにはやはり悲しみがあつてもその悲しみを打ち破る勇氣と剛らかさがなければならぬ」博は今後悲しみはなるべく作らず打消して日々の生活を送らうと思つた、そうすれば兄弟姉妹が居なくとも両親さえ居れば楽しい生活を送れるからである。

母によく云はれることだが「幸福と云うものは決して物質的なものばかりではない、世の中にはお金持でも不幸な人がいる、うちなどは金持ではないから精神的にさへ幸福でありさえすればよいのだよ、博ちゃん」博はこのことだけはいつも忘れない。

授業も終つたらしい、教室から外をながめると道ばたで子犬が親犬にじやれついている、親犬はうれしそうにふさけながら子犬の相手をしている、このような風景

を見ると博の氣持は自然にあたたまる様な氣がした。

童 草刈り

村岡 芳 矢

朝露ふみ、ふみ

さつく、さつくほい

野原で草刈り

さつくさつくほい

霧が流れてほおいほい

お月さま、お月さま、とけてくよ。

うたをうたつて

さつくさつくほい

今日も晴れたよ

さつくさつくほい

百舌がなくてほおいほい

お日さま、お日さまそらのぼる。

三吉という名の少年

二ノ五 川 上 潤 太



三吉は今年小學四年の少年である。彼は戦争末期に生まれ、終戦直後の物質の乏しい時代に幼時を過したせい、物質に對してはな

かなかちやつかりやである。一例をあげれば大勢の家族の中から晩御飯の時、盛り分けたおかずの中から一番に大きなおいしそうなところを取るのを見ても明らかである。しかも無意識の内に此の行爲が自然に最大の量と最良の味とを選び取る所を見るとこれは彼の本能の一つとなつて居るらしい。彼の父親は非常にきびしく、その反對に彼の母親は非常にやさしい。彼はお父さんの居ない時はうんと遊び、居るときは要領よく家の手傳いをするという器用な事も出来る。しかしこの三吉にも一つの取得がある。それは必ず弟の君夫を風呂へ連れて行く事であつた。彼の父もこの事だけはほめていた。ところが或る日の事である。

... 82 ...

会社から歸つて来たお父さんがいつた。

「三吉、昨日風呂へ行く時道草を喰わなかつただろうな。」

「うん。」

「ほんとうだろうな、もしうそついていたらこの火吹竹がものをいうんだからな。」

「君夫、ほんとに道草喰わなかつたよなあ。」

と三吉がいうと弟の君夫は少し變な顔をして

「う、うん。」

となづきました。

「ではどうしてあんなにおそくなつて歸つて来たんだ。」

「少しビ―玉やつてゐるのをみたよけたよ。」

「それみろうそついていた。」

といつたと同時にポコンと三吉の頭で火吹竹がいゝ音をたてた。

「何分位見ていたんだ。」

「十分位。」

「それから何處へ行つた。」

「裏道を通つて風呂へ行つたんだ。」

「あつそうだ、煙草屋の前で映画の廣告を見たんだつた。」

「それから。」

「それから風呂に入つて君夫を洗つてやつたんだ。」

「湯ぶねの中の水で洗つたんじゃないだろうな。」

「ちがうよ、だけど君夫が一人で洗つたんだよ。」

「それみろうそをついた。」

ポコンという音と一緒に三吉の顔はみる／＼ををかい目と鼻からは水が流れ出した。彼の頭にはそれと同時に昨日フロで弟に、もつと親切にしてやれと注意してくれたよその小父さんの顔が浮びました。

「それからフロを上る時に君夫の頭を拭いてやらなかつたな。」

「うん。」

今度は正直に答えました。

「それからどうした。」

「それから家へ歸つて便所へ行つたよ。」

「そんなことまでいわなくてもよい。」

... 83 ...

「お前のする事は何んでもお父さんの耳に入るんだぞ、これから火吹竹になぐられないようにしろ。」

と父は止めをさすようにいつた。

彼の持つて生まれた性質が正直なものになる日まで火吹竹が彼の頭に何度落下するだろうか。



島のおうむ

三ノ三 鮎木カツ子

ここは、他國にその悪名を知られている、マイダス王の宮殿のあるアミル國の首府パールである。道に沿つてずつと並んだ大きな建物、道を歩いている女の人や、美しい着物を着た旦那や夫人、それらのそばをこわそうに通るぬける貧しげな子供等、様々な人々が歩きまわっている。その人々を前にして、果實や、飾り物、服その他いろいろな物を賣る商人達で、毎日とてもにぎやかです。そのにぎやかな通りを人々にまじつて、物めずらしそうにあちこちながめながら来る二人の若者がいました。ひきしまつた口びる、青く澄んだ瞳、男らしいりんとした

もの。エルバだつてそうだろう。どこをて見もなつかしい。そして、又くやしくなるんだ。自分が正しい王でありながら、愛する市民達を幸せに出来ないことが。」

「マーカット様、私も同じです。良き君主だつた先王を倒し、聞くところによると、今は大變な我まま一ぱいの生活を、市民からは高い税金をとりたてている。そのお金を期日までに出さなかつたりすると、大變なつみとなるそうで、今も商人達がぐどいていました。」

「この上は一日も早くこの國を、父にかわつて取り返し、もとのようなよい國にたてなおさねばならぬ。我々に時期は來たのだ。」

「島にいる父達に、くわしく國內の様子や、宮中の様子を調べ早く知らせねばなりません。」

「そうだ。それによつて作戦王のその父が又一ねりするだろうから。幸い我々は外國の地理學者になりすまし、マイダス王の御殿に住めるようになった。この上は何事も秘密にし、王の家來達に我々の計画をかき出されぬようにせねばならない。もし判つてしまえば、二十年の我々の苦勞も水の泡じや。氣をつけようぞ。」

た顔つきの者と、その友達らしいもう一人の男は、いかにも朗らかそうな悪氣のない顔をしていました。瞳の男は本をこわきにはさみ、友達の前と歩調を合わせておりましたが、町をながめまわすその瞳には、時おりなつかしそうな色が見えました。しかし、しばらくするとそれは變つていました。じつと前方を見すえているその目には、無念そうな涙さえ光っているのです。友の男は時おり、人が道ばたで話合っている話に何となく耳をかたむけたり、商人の様子や、金持ちらしい人達のそばを恐るしげに通ろうとする、貧しげな人々の様子など目にとめていた。やがて、二人は町を通りぬけ、人通りの少い方に向つて歩き出した。じつと地を見つめている本の男に、友の男ははじめて話しかけた。

「王子様、どうお思いになりましたか。この町の様子を。聞かれて王子と呼ばれた男は云つた。」

「また王子という。エルバ、氣をつけなければいけないよ。人に聞かれたら大變だからね。エルバはどう思つた。私は今頭がいっぱいだ。いろいろなことが入り乱れて。生まれたところへ、やつと二十年ぶりで歸つて來たんだ

二人はこのような話をつづけながら歩いていつた。

この二人について、くわしく話をう。

マーカットは、アミル國の先王フリッツの王子であつたが、今から二十年前、左大臣マイダスの悪計により、その腹臣に寝ているところを、影のようにしのびこまれベットの土からさされてしまつた。妙な叫び聲に目をさましたエルバの父右大臣サバスチャンがかけつけた時は、もう虫の息であつた。

「王!! どうなされました。だれですか。サバスチャンですぞ。しつかりなさいませ。」その聲が聞えたのか、

「マーカット……、マイダス。」

二ツの名をいかけたフリッツ王は、忠臣サバスチャンの腕の中で、がつくり首をたれてしまつた。足をかえしたサバスチャンが、味方と思われる家來を集め、マイダスに向かうとした時はすでにおそく、かねて準備してあつたマイダス軍のため、逆にあおられてしまつた。右大臣はもうこれまでと思い、家來三人と共に王妃アンヌと赤んぼの王子マーカット、それに妻マリアと一子エ

ルバをやつと助け出し、追手をのがれ、自分がひそかに見つけ榮えさせたカルナ島へ渡つた。

平和の島カルナについた王妃達は、その島でくらすようになり、國を追われた王妃は、マーカットがりつばに成長して、もう一度國をたてなおすことを毎日心で祈つておりました。サバスチャンもエルバの成長をたのしみにし、たくましく育ちゆく我が子を力強く思つておりました。そして王妃と同じく、「この王子達がりつばになつたその時は、自分はいかにその王子様に對しても、もう一度アミル國をとり返さなければならぬ。きつと取かえしてみせる。」この忠臣の心は年月が流れるごとに、「一そう強くなつていきました。とうとう時期がきました。今はりつばな若者になつた二人はとうとうアミル國に足をいれました。」

二十年の年月が流れる間、あのように榮えていたアミル國も、悪いマイダス王のためにおとろえて、人々の生活は不安定になり、戦争をして暴れまわるマイダス王は他國に、毛虫のようにきらわれていました。

さんいる島におつれしなすうか」と時期をみていいたせば、物づきで我ままな王のこと、必ず行きたがると思ひ。このようにして澤山の家來達も島へ招き、その留守をねらおうと考へついたので。なにしろ少しの兵しかおりませんからその戦法もなか／＼むづかしい。

客の接待は、島の人にまかせることにしました。そうではないと、赤んぼうだつた王子やエルバはよいとしても、サバスチャンや、王妃はマイダス王に見やぶられる恐れがないともかぎらないので、サバスチャンは戦いの方をひきうけたのです。

このような計画のため、王子とエルバは、この國にのりこんで來たのです。幸い二人は學問に深いことから、マイダス王の氣にとめられ、宮中におかれるようになり、ました。

二人は主は主に宮中のてい祭と、市民の生活や、聲等に目を注ぎ、王の用事がある時は、何も知らぬふりをして、どんなことでも氣持よくしたので、マイダス王は敵とも知らずに、二人をこの上なく信用しました。不きげんな時でも、二人に氣げんをとられるとすぐなおるよう

反面、カルナ島の王子達は時は良しと思ひ、サバスチャンやその他の臣下と相談し、まず、王子自身アミル國に地理學者として渡り、様子をよく調べ知らせるようにし、島ではそれにより戦備準備をするようにきめました。それからもう一つ、王子は妙なおふれを出しました。それは、

「この島にいる大部分のおうむに『王様の馬鹿』という言葉をおぼえること。教えた者には、そのおうむとひきかえに賞を與える。

なにしろ、おうむの島といわれるくらいに、おうむのいる島ですし、もとよりなれやすい鳥のこと、どんな言葉をおぼえていきました。道を歩くと、あつちでも「王様のバカ」「こつちでも王様のバカ」おもしろいようです。中にはあべこべに「カバの王様」などというおもむきもでてきました。王子はなぜこのようなおふれを出したのでしよう。

頭のよい王子は、悪くらんぼうな王様によくある性質を利用しようとしたのです。我ままで、めずらしいことや、にぎやかなことを好む王様に「美しいおうむのたく

にさえなりました。家來達も「外國の若い學者」と二人のことを呼び、尊敬するようになりました。その反面、夜は二人共、島へ知らせる重要な手紙をかくため、おそくまでかかつてまとめ上げるのでした。

ある日のこと、マーカットはエルバにいました。

「どうだ。エルバ。もう頃はよいのではないかな。島でももう仕度はでき上つてゐる。あとは我々の知らせ一つで、この國も何なくとり返せるのだ。明日、マイダスに話してみよう。そして明日の晩は知らせを書くんだ」「えい、そうしましょう。あまり長くなつてもきりがありませんから。あ、いよ／＼面白くなつて來そうだぞ。腕がむづ／＼して來たよ」相談はきまつた。

夜が白々と明けはじめ、七色の光が空一ぱいに満ちあふれた、氣持のよい朝が來ました。マイダス王が丁度食事の終つた時、マーカットとエルバの二人がはいつて來ました。

「王子、よい朝でございますね」

「御きげん、いかがですか」

二人のあいさつに、王は満足そうに、

「お、ハインツツ兄弟、今朝は大部うれしそうな様子だが、何か良いことでもあつたのかね」見となつていたエルバが、

「え、今朝は王様に見えないおみやげを持てまいりました」

「見えぬみやげとは何かね」

「きつと行きたくりますよ。なあ」

とそばのマーカットにいう。

「どこかえ行くのかね」

「え、王様こしかけてお話し致しましょう」

マーカットのことばに、三人は日あたりのよいところにいすを出し、果実などをたべながら話しはじまつた。

「一体何の話なんだね」王子は話し出した。

「今まで私達は自分の國をいりませんでしたが、私達の國といつても島からなつてゐるのですが、とても美しいめづらしい島なのです。一年中暖く、食物も豊富で、地上の樂園みたいですよ。あらゆる木には実がみのつており、島は美しいみどり、まわりは清く澄んだ海にかこまれ

くざに答えました。

私はまだおうむをそんなに澤山見たことがない。それにこの頃は、やつら（市民の事）が金をあまり出さず文句ばかりいつてゐる。氣ばらしに樂園めぐりといふのか。家來はどのくらいいつていこうかな。その島は小さいのだから」

「いいえ、たとえ小さくとも、王様の家來全部おつれしても困ることはありません。どうぞ御遠慮なく」

「そうか。じゃ我アミル國の主なる面々をつれ申そうかな。食糧も船も心配なしと」

この時、王子はいつた。

「王様、お願いが一つござります」

「何んじや、云うてみい」

「大變失禮でございますが、島の者は戦を知らぬためかとても、武器をこわがります。まして島の島ですから、鉄砲の音など聞いたなら、どこかににげ去り、出てこなくなるでしょう」

「判つた。判つた。武器はつまぬ。安心せよ。家來の者にもきつくいわたししておく」

たすばらしい海岸、その上島には澤山のきれいな小島や、おうむがいて、道があるいてゐると、肩にとまつたりして、かわいゝものですよ」

王は王子の話に子供のように興味を感じて、

「おうむつて、あのきれいな羽をした鳥で、人のまねをするという鳥だろう」

「そうそう、その鳥です」エルバが答えた。

「私達が、今までだまつていたのは、うつかり人に話すという、中にはおうむを取りに来る者も出て来るのです。今までにも、そういう者が来て、おい返すのに大變でした。でもこの國の人は安心です。私の島へよんでもいたすはしないでしょう」

「どうです。王様、たいくつまぎれに一度いらつしやいませんか。おじの友人がその島のことをあつかつていますし、よい人達ばかりですから、私達のお世話になつた王様方を心からもてなすことでしょう」

「たいくつしのぎに、樂園旅行でもしませんか。私達もいつしよに行きたいと思つています」

二人の話に少なからず興味をひかれたマイダス王は、そ

王子とエルバは、口に出さぬが心の中でおどろいていました。何もかも思つていたとおりだ。しかし、それらぬ顔をしてエルバがきいた。

「王様、出發の日は何日頃がよいでしょうか。島までは船で二日か三日かかりますから、前もつて知らせておいた方が便利でしょうから」

「それもそうだな。うーん、一週間後の四月十八日がよい。その日にしよう。島へそう知らせるがよいぞ」

「はい、承知致しました。」

王様はさもおもしろそうに子供のよう、はしやいでおります。「おうむの島とは夢のようだ、何とおうむはいうのかな」

二人は、そこをひきさがり、部屋にはいり、かたく戸をしめました。

「王子様、うまくゆきましたね」

「うん、全くおあつらえむきだつたよ。」

「じゃ今のことや、當日のくわしいことをかきましよう」

「うん」それからずうつと二人は、部屋にはいつたきり

書くのに一生懸命でした。

王様との話合や、当日の我々一人一人の行動についてくわしく書いたたり、作戦や、その他いろいろなことがらを澤山書きつけ、終つたのは夕方近くでした。

いよいよ四月十八日になりました。マイダス王は主なる家来や、その家族を、豪華な船三隻に乗せて、夢の國、おうむの島「カルナ島」に向つて、アミルの港を出発しました。三日の楽しい航海をした後、王たちはカルナ島につきました。青い海にかこまれた緑の島、きれいな小島、枝もおれそうに實つてゐるめずらしい果實、島民の幸福そうな顔、どこをみても、この世の幸福を、この島だけに集めたような感じを與えたのでした。

王子の知らせによつて、カルナ島ではもうすつかり準備ができています。本國アミルの方では、商人達や農民と市民、そしてカルナ島見物に参加できなかった下級武士達だけです。王や、恐い官吏などがいないので、町はおまつりのようににぎやかでした。

島民は手におうむのえの旗をかかけ、王達をかんげいし

ました。そのかんげい團にかこまれながら、一行はハイネツツ兄弟のおじの友人の家（實は彼の城）に向つて進みました。その日は大變なもてなし方で、夜になつて大舞踏会が開かれました。

次の日、見物の人々は、島の人々に案内され島めぐりをしました。島のまわりを、花でかざつた小舟にのつたり、果實を木からとつて食べた時のそのおいしさ、見物の人々は舌づつみをうちました。小島と遊んだり、白砂糖をしいたような、美しい砂浜で遊んだり、全く夢のような日が二日つづきました。

一万、サバステヤンは、隠しておいた船と、うまく手にいれたマイダス王の舟一隻と、かねて他の國と相談し、かしてもらつた兵隊をひきつれて、王達に知られぬよう島をぬけだし、アミル國へせめいりました。そんなことは知らない王様は、この楽しい生活がうれしくてなりません。自分でそばによつてくるおうむに、食物をやつたり、おいかけたり、子供のようです。三日目の晝ごろ王は、そばにゐる案内人にたずねました。

「このおうむは何かいふかね」

「バカ王様！」

と叫び、中には王様の頭上にとまり、叫ぶものもいます。はじめは、ただ、びつくりするだけでしたが、あまりいふので、とうとう、日頃の我まゝな、気短な心があるわけて來ました。案内人は平氣な顔で、

「何とも仕方のないことでして。このおうむは、人がらが判るのか、この間來ましたミリーヤ國の學者にも「おこりんぼ！」といつて大笑いしたことがありまして」

王様は、とうとう、おこつてしまいました。

「何とけしからぬ鳥どもだ。わしにむかつてバカとは、うーんつ、もう我まんできん。者共つ、この島のおうむを殘らず捕えろ。ええつ、かまわぬ、早くとらえてしまえ。」

家來達は、王様の氣が立つたのを知り、とらえようとした。しかし、腰には劍もピストルもない。來る時、みんなおいて來たのでした。來る時の約束だつたのです。しかたなく、小石を拾つて投げつけました。案内人は、あわててとめました。

「いけません。いけません。おうむを殺すとどなた様で

「はい、この島にゐるおうむは、他からお客様が來ますと、二日くらいは何もいけません。じつとその人々の様子を見ているのです。けれども、もう今日は何かいふでしょう。おうむや、王様にあいさつなさい」

案内人が、そばの枝にとまつてゐるおうむに話するよううにいました。「王様」ということばに、おうむ達は何か思ひ出すように、首をかしげていましたが、マイダス王が、

「これ、かわいいうむや、私はマイダス王だ。世界中で一番強い王様はこのわしなのだ。判つたかね」

半ばじまんそうにこういつた時でした。

「王様のバカ！」

一羽のおうむが奇妙な聲をはりあげました。

それを聞いた王は、

「あれつ。わしのことをバカなぞといつとる。聞きながいかな」

と思つたその時、今度は、そのあたりにいたおうむ達が、あの奇妙な聲で、

「王様のバカ」

も、重いつみになります。おうむは、島の住民と同じなんですから。あうむを殺したなら、きつと、悪いことがおこります。國の一大事のようなことが。」

とめる案内人の聲など耳へはいらず、王様はおうむをとらえるのに夢中です。赤い顔から湯氣をたてて、大きなふとつた体で追いかけます。

「何をしてるんだつ、そら、そこにいるつ。このとりめつ。」

おわれておうむは、へんな聲を発しつつ、あちこちにげまわり、いく羽かのおうむが、石にあたりました。

x

それから、數分後、王様達は、島の者にとりかこまれ、城の庭に出されました。その真正面には、王冠をのせたマーカットと、その兩脇には、アンヌ妃と、劍をさげたエルバがしがつています。この様子に驚いた王様に、マーカットはりんとして云い放ちました。

「父のかたきマイダス王よ。今こそ、そのあだをうてるのだ。お前は、わしが誰だか想像つくまい。ハイネツツなどとは假の名じや。しかし、王よ、母上を見よ。誰だ

か判るであらう。」

云われて王妃を見上げるとマイダス王の顔は、みる／＼變つていきました。

「おゝつ、お前はアンヌ妃！」

「いかにもそうじや。今から二十年前、お前のために危く殺されるところを、当時の右大臣、今はこの島の総長サバスチャンに助けられ、この島に渡り、ひそかに再起を計つていたのじや。すい分御立派になられたのう。」

アンヌ妃のことばに、さつきから驚き通しのマイダス王は、驚きのうちに國が心配になつてきました。

「ええつ。再起を計つていたとな。」

マーカットは云つた。

「その通り、きつと今頃アミル國は、サバスチャンのひきいる兵隊のため、簡単に降参しておることだらう。兵は少なくとも、作戦にかけてはすぐれているサバスチャン。きつともう二、三日で吉報が届いてくる。どうだ。

どうだ。マイダス王、もういゝ加減にかぶとをぬげ。お前がおとなしく降参すれば、命は助けてやる、家來がかわい／＼と思つたなら、降参しろ。他の者は皆、無事に國

におくつてやる。少なかつたが、世話になつたお禮だ。もう、じたばたしても何にもならぬのだ。」

マーカットについて、エルバも叫んだ。

「アイマイダス王お前の家來達は心からお前につかえてゐるものはごく少ないのだぞ。皆、お前がおそろしさのため、服従しているのだ。市民も商人も、あらゆる人々がお前を憎んでいるのだ。今こそ、そのうらみを受けねばならなくなつたのだ。」

「しかし、エルバや母上、サバスチャン等と相談した結果、命は助けてやる、船も一そう與えてやる。遠くの地へ立ちのき、もう一度きれいな心を育てていけ、この地圖をやる。そこには、第二のカルナ島があるはずだ。食糧の心配はない。家來の中で、王といつしよに行くものは行つてもよい。そして、心の弱いマイダス王を、正しいお前達の心で導いてやつてくれ。」

王子のことばに、マイダス王は深くうなだれた。次の日、何人かの家來と共に、王は、第二のカルナ島へ向つて島を出ていきました。

x

それから數年後、パール町の町にも楽しそうな風がなびくようになりました。町の人々の顔も皆、幸福そうです。

カルナ島は、樂園島として、なお一層美しく榮えた島になりました。遠い外國から、はるばる来る人も出て來ました。

今は、アミル國のよき王様となつたマーカットは、美しい妃や、宰相サバスチャンと、りつばな學者となつたエルバと共に。時々、カルナ島へおとすれました。

マーカット王にとつては、第二のふるさとです。しかし、ここに一つ困つたことが出來ました。困つたこととは、何でしょうか。おうむは今でもあの言葉を忘れないのです。

王子だつたマーカットが、作戦のために、教えましたあの言葉を、まだ忘れないのです。「王様のバカ！」さすがのマーカット王も、おうむ達にその言葉を忘れさせることはできず、その奇妙な人まね声には、ただ、苦笑いするばかりでした、よい王様の手に返つたアルミ國は、カルナ島と共に、ますます／＼榮えました。

おはり



回想

志賀昭太郎

足音は小さくなる。微かな迄に遠ざかった。然しきゝのがしてはいけない。貴重な響きだからだ。この響きすら才月の流れと共に私の脳裏から忘れかけようとしている。過去を眺め現実に立脚し、未来を夢みて私達の生活は続けられるのだが、残されたものは忘れこれからとらえようとするもののみに私達の觸角は向けられるのが常だ。これが年令的に若ければ若い程強くはたらくに違いない。

私が教職についたのは昭和二十三年四月一日早五ヶ年になるうとしてゐる。年月の商車は幾回轉しても私の齒車はまわらない。俗物の悲劇とでもいおうか、ありきたりな世相の波に押し流され、濁った空気を呼吸して、いつもジタバタしていなければならない。なんとかしなければならぬとあせればあせるほど頭上の重さは倍加する。

につけ、三年計画のもと、優勝を夢見たものだつた。

當時野球部には確固たる人物が揃つていた。快腕布施君、強肩安島君、一壘小野君（昨年卒業）二壘笠原君、三壘庄司君、遊撃梅田君、左翼木田君（昨年卒業）中堅木田君、右翼大江君ズラリ各クラスの委員長級が野球部員であつた。学生野球はあくまでも見世物ではない。地味なプレーの中に、最後までねばるフアイトがなければならぬ。ともすると観衆は美技によい、確実なプレーを軽蔑するようなことがあるが、そんなものに耳を傾けるようでは眞の学生野球ではない。泣き年ら、齒を喰ひしぱりながら、ひたすら苦難街道を突進し、遂に三年計劃優勝の榮冠は、我が校の野球部に輝いたのだ。

現在布施君は平工の主戦投手、大江、小野君は小名高の重鎮をなしている。梅田、兩木田君も、髯高に於いて着々と技術を練磨しているとのこと。相當な所までこぎつける日も、さして遠くはあるまい。

終戦後とみに隆盛を極めた野球は、色々な面で利害を與えた。「健康保持のため是非やつてくれ」「動作が非常に活潑になつた」「勉強がおろそかになる」「体に強す

る。

小名浜という所は、他の農村や炭礦地帯と異つて、一種獨特な臭を放つてゐる所である。生活レベルに於いても、知能レベルにしても、その差が余りに多すぎる。考えようによつては非常にやり易い所であり、反面極めて手のほどこす術を知らない所でもある。それはごく幼年時代、小名浜の一角しか知らなかつた私にとつてはいばらの路であつたことには間違いない。二十一才の若さが、ひたむきな篤進をしてこそ、ここまで流がれたようなもの、それではなくモミクチャな年令であつたなら、とうてい一時も暮すことが出来なかつたらう。

私がこゝに來て抱いた最大の理想は強い野球部の建設だつた。強いと云つても唯相手を敗かしさえすればよいという強さではない。高度な識見と人格をそなへ、見るからに頼もしさのある人間としての強さである。ガツシリしたチームワーク、技と度量がマツチして見事なプレーの展開される野球部、終止私の脳裏から離れることになつたのはこれだつた。一、二年は敗れてもいい、たいてい、たいてい、たたくのめして不動の基礎技術を身

ぎる」色々な方向から、あらゆる苦狀と注文が入つてくる。過度期と云うものは實につらいものである。然しやがて安定した時期の到來に自信をもち峠を下つたのである。

小名浜の人間程野球の好きな集りも稀ではなからうか。勿論好きだと云つても、眞に野球を楽しむのではなく、一時の暇つぶし程度の人達が大半を示るのではないかと思われる。漁夫が一見して多いことも、陸での少い時間の満喫なのだろう。こうしたフアンが多ければ、多い程、野球としての生命も非常に危険な状態にあると見なければならぬ。本来の野球道から離脱し、いわゆる草野球としての邪道さが目芽えるとするならば、余程この点慎重を期さなければならないと思う。

古ぼけたグロブシかなかつた時代から四回の卒業生を送つた。高校に社会實務に、夫々の特徴を伸ばし余暇を利用しての練習に、邁進していることを耳にしては、何より悦んでいる私である。こうした卒業生がどうしてかつてのチームワークをとりもどせないのだろうか。例年の町民大會に於いても、各チームに分散することは、

私にとつて不愉快きわまりない。各自はどうあつても、卒業生同志のチームを編成したなら、どれ程の立派なチームが出来上り、まとまつた試合が出来るのに思ふと、私は残念でたまらない。よりよい先輩には、より立派な後輩が続くものである。後輩が先輩の指導を受け、上達し、先輩になり後輩を導く、かくしてこそ傳統としての強さが発揮され、永遠に磨滅することのない光を放つことになるのである。こうした合一チームが完成されることを、私は最大の企願とする。

静寂な中には常に波動があるものだ。一見平和な人間社會の中にも生存競争のきびしさがあり、生活意欲のない者は容赦なく投げ出される。穏やかな大河の流れにも、渦巻と逆流の葛藤が絶えず続けられていることを見逃してはいけない。

波動のきびしさは五年間にも交互にやつてきた。

二十三年の陸上競技大会には、四倉に惜敗し、二十四年度優勝の鍵をねらつた。華やかなトラツクのみで重点を置いた指導法の欠陥がたつたのだ。二十四年は重点を一変した。トラツクよりフィールドへ、何競技に於いて

になつたのである。恐らくこれが女子としての最高であらうと思われる程の素晴らしさであつた。脚をもみ、サロメチールをつけてやり、作戦を與え、元氣づける急しさも、又疲労を忘れた楽しさだつた。

二十六年は三段跳に櫻井君の大会新、布施君の砲丸投の大会新と二つ新記録を樹立、男子軍の意氣物すく、同年夏福島で行われたジュニアレクリエーション大会に於いても兩君共に二位という輝かしい記録を残したのである。

實に多くの苦勞が伴う(指導面)中に稻川先生の内助は頗るきわだつた。二十五年とは又逆に男子優勝、総合優勝の三年連続優勝という郡下最初の記録を打ち立てることが出来たのである。二年連続優勝は可能であつても、三年連続優勝というのは、困難中の困難事である。

雑誌発刊にしても三号危機と言つて慶刊をまぬかれない状態にある。まして陸上競技に於いて、その榮譽を勝ち得たことは、生徒諸君の努力は言うに及ばず、直接、間接に御指導、御援助下さつた各先生方の賜物であり感謝にたえない。

もそうだが、試合の日はどうベストコンディションを持つてゆくか、最も頭を痛めるところだ。石井君(現在小名高三年)の走高跳一米五十一大倉新記録は二十四年度縣下中學校大会の最高記録である。恐らくスパイクなしで、然かも十四才の少年の記録としては驚異的であり、私は思わずグランド(磐城女子高校)で感涙を覚えた程だつた。こうした立派な記録は彼の持つ人間性の良さと、素直さ、ねばり。研究心であつたと思ふ。バネがよかつたことは勿論である。とかく自己の持つ技術のみを鼻にかけ日頃の努力をおこたがりになるのだが、石井君は決してそれがなかつた。實に偉い男だと思つてゐる。今でも後輩の爲に、シーズンになると、グランドにユニホーム姿を現してくれることは悦びにたえない。この外松本君の(磐高三年)走中、リレーなどの上位入賞があり、女子に於いても坪内さんを始め、相当の活躍があり男子優勝、総合優勝という榮冠を獲得したのである。

二十五年は坪内(平商)初瀬(小名高)江幡(小名高)佐藤(小名高)東(小名高)さんの女子軍の活躍目覚しく女子優勝、総合優勝という二十四年とは逆な結果

一年は夢の間に過ぎ去り、又大會の時期が到来した。

三年連続優勝の安堵が、心理的に微妙に作用し、四年連続優勝などは更に望まなかつた。その点昨年度に比べ、精神的には楽な練習過程を通ることが出来た。最優人間をビックアップしベストを盡くして闘う。唯それだけのことである。

トラツクに、齋藤君、柴田君、布施君、を中心とし、フィールドにキャプテン蛭田君を中心としての陣容を組んだ。

女子はリレーに若干の期待を持てたが多くを望めなかつた。百米に十二秒六で齋藤君が一位、柴田君四百に二位、八百繼走に一位、暫らく振りに陸上の華トラツクに優勝したあの力走振りは、今になつても、私の瞳から消えない。蛭田君よくキャプテンの面目を発揮、走中に一位、木村君三段に二位、女子の繼走決勝二位を加えて、川部中を僅少の差で破り、昨年に引き續き男子優勝、総合優勝が、圖らずも遂行されたのである。常にトップに立ち、力走に力走を續け、優勝の原動力となつた齋藤君の努力に私は唯々頭の下る思いだつた。

〃四年連続優勝〃私の脳裏には、いくつもの雑線が去

來する。

スポーツの華、國民体育大会の開會式が、二十七年十月十九日、信夫丘競技場で、天皇、皇后兩陛下御臨席のもと、いと莊嚴裡に開催された。この開會式直後オープン競技として縣下中學校ブロック代表の四百米及び八百米競走の天覽試合が行われることに決定し、石城代表として、男子八百米競走に、吾が校が選ばれ、勇躍壯途にのぼつたのである。がそこに一つの悲報を耳にしなければならなかつた。ラストランナーの布施君が、前日までの元氣なトレーニング姿から、一夜にして病床にふす身となつた。盲腸である。宿命とはいふ余りにも痛い。然し上福中の病倒を思えば不幸中の幸であつた。

切開し、ベットに横たわる布施君を見舞つた時、學校の名譽にかけてもと思つたのに、欠場の止むなきに至つた悲奮の落涙は、私の目にしみ印象的だつた。

齋藤、柴田、蛭田、木村、補欠中山の各君に、校長先生、吉田先生と私が付添である。市内は勿論、近郊の旅館は満員、宿舍が保原だといふさか顔をひかめざるを得ない。旅先での熟睡は殆んど不可能なのが普通だが、

大會前夜の各君の自重さは、泪ぐましいものがあつた。早朝全員起床、朝食前のトレーニングまで自主的にやつた程だつた。

校長先生と吉田先生は眞すぐ競技場へ。選手と私は三小へ、各代表選手定刻まで集合完了、軽いトレーニングをして、競技場へ向つて出発、会場は數萬の觀衆でどよめく。限畔に立ち、開會式の景園氣に一時間ひたり、疲労を考慮控室で休養する。

十月とは言へ福島氣候は肌をつく。時間は刻々と近づく。ユニホーム姿となる。愈々大會の幕は切つて落された。天皇、皇后兩陛下の御前がスタートラインである。号砲一勢ランナーがとび出す。場内アナウンサーの連報にも自ずと力が入る。「トツツは小名浜一中であります」私の鼓動の高鳴はいやが上にも高まる。齋藤君の力走、二位を十米以上離してのタツツ、私の胸は熱くなつた。柴田君依然としてその路障を保ちタツツ、蛭田君短縮されたとはいふ、依然としてトツツを保持ラスト木村君よく力走したが、及ばず、決勝寸前遂に三位となる。タイム一分四十八秒二。

賛賞したい。

スポーツマンはすべて、そなたが技を誇つてはいけな。高い知性と、教養を身につけ立派な人格の持主が眞のスポーツマンである。

むすかしい女子選手の心理と技術を一手に引き受け、受難のコースを辿つたのは田中先生の排球部だつた。二十四年は敗れ、二十五年こそはの意氣を高めた。好間での一戦(決勝)連續聲、聲をからしめての應援も今はなつかしい昔の語り草となつた。

過去の体験は、練習過程に大きく左右する。その甲斐あつてか、二十六年は見事初優勝をとげ、ジュニヤ大會出場権獲得の錦を飾つたのである。榮冠涙あり、田中先生の心中、察するに余りあるものがあつた。

多くを見てそなたが、最後のポイントに女性に弱い。ねばりが無いのだ。チームワークがすぐ瓦壊する。精神的練習がより多く必要なのだ。少しの失策にくさらず、最後まで得点のチャンスねらう度量が休得出来たら、女子のレベルはもつと、もつと向上するに違いない。

バット一時に咬いた感の深いテニス部、小松先生の努

吾敗れたりとはいふ、少しの苦悶も残らずあの時の競技氣持のいゝ試合はなかつた。第一豫選通過直後、校長先生の微笑顔が見えた時、私は思わす走り寄つた。宿舍に歸つてから反省談はつきず、翌日無事歸校したのである。

あらゆる困難事(特に經濟的)を克服し、出場のために、多大なる御援助と御聲援を賜つたP・T・A會長初め、父兄の各位、先生方、生徒諸君に満腔の感謝を捧げたい。

一つの競技が固定化するというのは恐ろしい。それが或る一定の強壯性となり、いわゆる傳統となる。傳統という語感の中には善惡の二方向があるにせよ、私の思考範ちゆうには、惡の字は考えられない。卓球部の連續優勝もその一つだ。曾我さん(現在小名高二年レギュラーとして縣下大會に活躍)等が中心となつての奮戦も去ることながら、終始部を育んでくれた高橋、高津先生の熱意も忘れることは出来ない。今年度は男子、山本君を中心としての活躍なり優勝、不幸にして榮冠はかち得ずもよく二位に喰いこむ主因をなした手塚さんのリードも

力が結実し、二十六年は男子優勝、二十七年は男女優勝というテニス黄金時代を現出した。莫大な設備を要するテニスの普及は困難事にしても、真夏の午さがり、真黒に陽焼けた女子選手の練習振りは楽しくもあり、氣の毒でもあつた。

かくして、血と汗と涙の結晶であるカップは毎年校長室に五指を越して飾られた。カップと優勝旗を眺める度に、私の脳裏には、一年間の喜怒哀樂が、フィルムのごとく去來する。なつかしさは總身をゆすぶる。私の人生にこの感激が幾年続くだろう。命ある限り私の心の奥にしまつておき度い。

杉原さんはどうしているのだろう。あれ程面倒を見た人間が一信もなく姿を消している。昭和二十三年の郡下中学校辯論大会に初めて参加させ、四位に入賞、つい最近のような氣がするが早いものである。もうあれから五年になろうとしている。近眼だつたが、頭のされる生徒だつた。

新妻さん(現在三年)の才能を発見したのは二十六年、水産学校主催の郡下中学校辯論大会の時である。それま

で酒井先生が指導され私は附添で同伴した、真の自由に二位入賞、聲量、音声、アクセント、發音、態度、非常にいい。女としては珍らしい力量がある。私は次回が待ち遠しくなつた。

二十七年四月、警察署による縣下大會派三郡豫選が行われた。交通道徳に關する演題である。審査委員長が、民報平支局長菅野氏である。交通道徳昂揚は私達の手で、時間七分堂々優勝の名譽を平一小講堂で飾つたのである。同伴した母親も満面悦びで溢れた。私もホット一息つくことが出来た。次いで三位まで、愈々縣大會出場の運びとなつたのである。『愈々中學校の部が開始される。六番目なのでどうか入賞を祈る。さすが縣大會ともなれば、技術拍中何れが何点かの点数も判斷しがたい所、とに角入賞さえ出来れば大したものだと思う。愈々登壇、どうか最後までしつかり、ラストの方で一寸あがりきみたつたが、ともあれ實力を十二分に發揮、終つて大丈夫だと自信を持つ。然し心のあせりは言語に絶する。こんなに氣をもんだのは最近にない。白河の二年生を最後に辯論戦は終了。あとは、審査の結果を待つばかりでゆく。

在職五年の回顧は、或いは強く眞黒な烙印に、或いは淡い秋の白雲に、諸々の方向から押し寄せては消えてゆく。想い出はつきない。

私が来た時は何もなかつた。目の上のコブだつた麥畑は除去され、バスケットコートが作られ、バレーのボールが立ち、先生方の大工によつて待望のバックネットが新設された。柔道場も完備し、テニスコートも併用され、校舎の周囲は数百本の樹木が植えられた。グラウンドには荷馬車数百台の土が盛られた。最も頭を痛めたドブも土をおい学校生活の場合は、日に新に学習意欲をそゝる迄に整備された。

私は靜かにグラウンドに立つて考える。作業衣になつた先生方の肉体が動き、全校生徒諸君のたくましい腕にスコップが持たれた時、成長する肉体のどこかに刻まれた二度とないなつかしさ。

校長先生自ら作業にスポーツに陣頭に立つたあの姿。五年間の變遷をじつと私は熱いもので見守る。

この一握の砂にも、あの樹木の一葉にも、私には切れ

り、不安と心のあせりは、重苦しく室内にみなぎる。審査員が別室で會議をしないとは珍らしい。愈々発表。優勝坂下中學、ハット胸を打つ、二位、三位、最後まで入賞の希望は捨てない。四位新妻かつ子さん、ほつと安堵の胸をなで下す。これで責任は遂行、新妻さんの顔もさすがに明るい。警察隊長湯淺氏よりの賞品賞状授與、祝辭あり、審査委員長の講評、全くうまい辯士であると言でひねくられる。終つて記念撮影、三時五十分発なので駅に急ぐ……四月二十七日の日記の最後の方に當時の様子がこんなふうに書かれている。頭痛がすると元氣がなかつた彼女はよく頑張つた。今でも壇上の叫びが耳の底から響いてくる。

辯論大會も最後、連合P・T・A主催の郡下大會が十二月湯本一中で開かれた。最後を飾る意味に於いても無理を通して出場、貴重な勉強を割いて心よく引き受けてくれた態度に感謝の氣持で一ばいだつた。四日間、放課後二回の練習、入賞者五名、同点なので、再投票し決定したとの審査委員長の報告、新妻さんは三位入賞、審査の方法に不服をもつたが致し方がない。私は私の信念で生

ない愛着のきづなとなる。

どこからだろう。小さな足音がする。私は耳をすまして。冬の寒さにさいなまれて、じつところえていた春の足音だろうか。

昭和二十八年一月十日夜二時脱稿

子供銀行組合便り

私達が子供銀行を始めたのは中學に入學してきたわけなのですが、その間にいくたびとなく子供銀行取扱者がかわつたかしません。そのたびに子供銀行の諸先生方に、どれ程手数をかけているかしれません。だが今は落ついて来、私達が係員となつてゐるわけなのです。私達もこういう事をした経験もないし、どうするかさえもしなかつた子供銀行係としての自信ももてず不安な氣持でいましたが、いくたびとなく回教を重ねるにつれ、仕事の能率も増し仕事に対する興味も感じるようになるに至つたのです。昔から「ちりもつもれば山となる」ということわざのある通り、毎週水曜日ごとに

聞き、各人が少しづつ子供銀行につんだお金も今は何と、十七萬九千圓近くになつたわけですから。組別に分けてみますと少い組で二萬一千圓、多い組で參萬七千圓という金高になつてゐるのです。こうしたお金が今盛んに行われている産業復興の資金とか、又いろ／＼な方面に、かしたされ國家のために働いてゐるのです。

貯金というのは自分のためにも又國のためにも種々な方面で非常に役だつてゐるのです。特に日本は政治上の經濟面に於いても今は樂ではないようです。各町村とも町や村の復興に力を注いでゐる時で色々と多くのお金がかかります。それには私達一人づつがお互に節約し少しでも協力していかなければならぬと思ひます。

それから貯金係として利益を得ました事は、お金というもののはどのように大切で又どの様な順で世間をまわつてゐるかということや責任感の強い人間にもなれ、私達としては非常にうれしい事です。これからお金のお金の大切さを良く味い無駄なお金は節約し貯金額を上昇させ少しでも町のため、村のために役だちたいと思ひます。

子供銀行係

北川 郁子
柳 内 京子
佐藤 孝子
佐川 美代子
宮本 恵子
高萩 ミヤ子
運賀 和江
佐藤 薫
小峯 俊子

子供信用組合便り



昨年十月上旬の或る日、私達四名が先生から呼ばれ今日から子供信用組合の事務取扱者になつてもらい度いと相談を受けました。私達はこんな仕事をするのが全く不安でしたが引受ける事に致しました。それから毎週水曜日に事務を開始致しました。最初は、一枚の傳票を書くにも、先生先生と尋ねましたが、回を重ねるうちに差程困難な仕事でなくなりました。委託書

の受付、現金の調査、傳票の発行、台帳と通帳への記入等すべて完全に出て来て先生に賞められた時の嬉しさは仕事の責任を遂げた者のみが味える喜びです。この頃では各組、各個人の成績をも解る余裕が出来ました。現在は貯金額も相当上昇してお金は町の産物のために利用されてゐると先生がおつしやいました。今、日本は間もなく色々お金がかかる事が多いとの事です。私達も出来るだけ節約してゆかなければなりません。この仕事は、私達が經濟生活の状態をしる皆さんも無駄を省き貯蓄心の向上につとめようではありませんか。

一年三組

馬 上 ハツ子
新 妻 操
斎 藤 ユウ子
松 浦 喜美子





初産は苦しい。けれど生まれる者にとつては、新しい世界の躍動と、希望が待つてゐる。この希望と躍動を思う時、それに伴う多少の苦しみは耐えしのばなければならぬ。今こゝに印刷の香も新らしい「蒼海」創刊号を諸君の前におくることの出来たことを最大の悦びとする。誌名、表紙の應募も多數あり、誌名は九十種の中より大山さんが当選、表紙も三点の應募があり、審査の結果、何れも選外になつたことは残念の至り、然しその熱意に對し感謝したい。又應募作品數百篇を越え、どうしても割愛のやむなきにいたつた諸君に對して申し譯なく思つてゐる。無経験な諸君の作品を想像し、或る不安がないわけでもなかつたが、集まつた作品は意外にも洗練され一瞥、余りにも良すぎて困惑したものも二、三あつた。あくまでも自分の力を信ずることが大切である。自分の書いた字が印刷になるといふことは非常に嬉しいものである。

二月中に完成し三月初旬に諸君の手もとに、おくるわ

けであつたが、半月余の遅延になつてしまつたことに對し深くお詫びする。作品選擇、編集、校正、交渉と授業の合間／＼に血の出るような御協力を下さつた高橋、草野、稻川、河原田、鈴木、田中の各先生方にあらためて深甚の謝意を表したい。「蒼海」はあくまでも生徒會誌なるが故に二号からは生徒自らの手によつて完成されることを望みたい。

陽光うらかな春四月卒業生は進學に、就職に、若人の胸はいやが上にも高鳴るだらう、三ヶ年の交友は年と共に親密さを加え、作品を介しての友情と激勵を過去の足跡に想起し、生徒會誌「蒼海」と共に永久に榮光あれと祈り筆を擱く

一九五三・三・一六 志賀



蒼海

創刊號

【非賣品】

昭和二十八年三月二十日發行
昭和二十八年三月二十日印刷

發行人 鈴木孝雄
編集人 志賀昭太郎
印刷所 長瀬印刷所
印刷人 長瀬芳郎

福島縣石城郡小名浜町立

發行所

小名浜第一中學校文藝部

電話二七〇番

昭和二十八年三月二十日
寄贈 日中書店

御 婚 礼 出 張 引 伸 は
麗 美 な

鈴 木 寫 真 館 へ

TEL 18

御 卒 業 の 記 念 品
進 入 學 の 御 用 意 は

學生の店 **泉** 小 泉 屋 へ!!

電 話 1 2 2 番

歴史は古く商品は常に新し

海 は 小 名 浜 旅 館 は 玉 屋
数寄屋造りのお部屋  完備した感じのよい浴室
お 客 本 位 の サ ー ビ ス

玉 屋 旅 館

(門 馬 一) TEL 394

大 衆 食 堂

天 満 屋

TEL 417

貴女の髪の毛の
ニユー・ルツクは

田中美容室へ

TEL 309

※勉強に書き良い
……學！用萬年筆をY100より
※楽しい學窓の思い出を
……サイン紙にY20より
……アルバムにY160より

昭和堂文具店 TEL 669

クローバー印
硫 安

日本水素工業株式会社
小 名 浜 工 場

代表 { 電 501 番
話 504 番 庶務課直通 119 番

映 畫 常 設 館

磐 城 座

TEL 154

56 — 80

三
猿
文
庫

7972